

クロスロード

5



特集

任地での活動を充実させる！

語学力の伸ばし方& コミュニケーションの工夫



クロスロード

2024 MAY

Contents

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集

6 任地での活動を充実させる！
語学力の伸ばし方&
コミュニケーションの工夫

14 派遣国の横顔 マダガスカル
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり&アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！私の派遣国生活



表紙よせて

配属先は、政府が国内の病院へ分配するために一括購入した医薬品を管理する機関です。一緒に写ったカウンターパートも薬剤師で、薬の品質や成分をチェックするラボを本格始動させるべく共に活動中。技術者不足や試薬不足などたくさん抱えている中、安全な医薬品流通のため親切的な同僚と楽しく取り組んでいます。市河有由希さん（東ティモール／薬剤師／2022年度3次隊・北海道出身）

■国別索引	掲載ページ
エジプト	9
ガーナ	7
グアテマラ	11
コートジボワール	19
コスタリカ	24
ジブチ	8
スーダン	9
セネガル	2
ソロモン	24
タイ	26
タンザニア	23
チュニジア	36
ニジェール	30
ネパール	10
パラオ	4
パラグアイ	34
東ティモール	1、28
ホンジュラス	5
マダガスカル	16、17、18、19
モロッコ	21
ルワンダ	35

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	11、23、28、35
村落開発普及員	17
交通安全	10
防災・災害対策	24
水路設計	21
青少年活動	18
環境教育	9、26
音楽	5、19、34、36
小学校教育	2、4、7
幼児教育	19
生態調査	16
服飾	8
薬剤師	1
エイズ対策	30

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	1、16
岩手県	2
山形県	30
福島県	36
茨城県	8、26
千葉県	19
東京都	24
新潟県	28
神奈川県	10
愛知県	7、21
滋賀県	5
京都府	18
奈良県	9、17
岡山県	11
広島県	23
香川県	4
長崎県	34
大分県	35
沖縄県	24

【凡例】

JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力隊員さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)
氏名 派遣国 職種 隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局



菅原さんは図工と体育のほか、子どもたちの計算力の向上も必要だと感じて算数の指導も行った

自分の手形を描いてから、お菓子の空き袋を貼った貼り絵。「食べ終わった袋は洗って取っておいて」と言う子どもたちは素直に持ってきてくれました

子どもたちに
伝えたいSDGs

世界の学校

図工の授業や運動会を通じて 作る楽しさや協力の大切さを伝えました

菅原芽衣さん（セネガル／小学校教育／2017年度3次隊・岩手県出身）

セネガルの地方都市ンバケ市内の小学校を巡回し、図工や体育、算数を先生たちと一緒に教えました。まず始めたのが図工の授業です。先生たちから、「図工は自分も習ったことがなく、道具もないので授業のやり方がわからない」と言われたためです。最初は私が絵の具などを用意して児童に絵を描いてもらいましたが、任地にあるものを活用すれば先生たちも教えられるようになると思い、お菓子の空き袋を使った貼り絵や、ノート用紙を使った折り紙などを教えました。児童も楽しんで作品を制作し、図工の授業を行うクラスも増えていきました。活動2年目には体育に力を入れました。カウンターパートである視学官（※）が、協力隊員たちの他の都市で開催した運動会を視察し「チームスピリットや頑張る姿が素晴らしい。ンバケでもやりたい」と強く希望するのを受け、開催に向けて準備をしていきました。体育の授業では、玉入れ、綱引き、障害物競走、リレーなど競技のルールを教え、それを守ることやみんなで協力して行うことを伝えた上で、練習をしました。図工の授業では、玉入れの玉やバトンを手作りしました。当日は、児童が真剣に競技に取り組み、勝って喜び、負けて悔しがる様子を先生たちも応援し、とても盛り上がりました。それまで体育の授業は家庭をただ行進するといった内容が中心だったので、運動会は児童にも先生にもとても新鮮に感じられたようでした。セネガルでは就学率の急速な増加に対して、児童一人ひとりを見て教えるには教員が足りず、進級試験をパスできずに落第する子もいます。1年時には1クラスに100人程いた生徒が、6年時には30人程になることでもあります。私は赴任当初から気になっていた算数の基礎の指導にも、任期中盤から取り組みました。落第する子が一人でも少なくなることを願っています。

from Japan



地域で育った木の種を採取して植林 森の多様性を取り戻す「タネカラプロジェクト」

清水美里さん（ホンジュラス／音楽／2007年度3次隊・滋賀県出身）

山で木の種を採取して育て、山に戻す市民活動「タネカラプロジェクト」を実施しています。私が生まれ育った滋賀県高島市では、琵琶湖源流域に豊かな森が広がっていますが、子どもの頃に比べて草や木の種類が少なくなり、森の多様性が崩壊しかけています。主な理由は地域で増加する野生の鹿が草木を根こそぎ食べてしまうからです。生態系への配慮に欠ける森林利用や無秩序な伐採も森の荒廃に拍車をかけています。

2022年に設立し、私が代表を務めるタネカラプロジェクトの会員は地域住民などを含めて現在75人ほどです。毎秋みんなで森に入り、木々の種を集めています。採取した樹種は80種に上り、会の圃場^{ほしやう}で育てています。成長した苗は、山の状態を観察しながら配植計画を立て、地域の山に植樹していく予定です。

発芽に数年を要する樹種もあり、植樹するまでにはさらに長い年月がかかります。地味でお金にならない作業ですが、森づくりの循環サイクルの中で最も滞っているスタート段階に焦点を当てた長期プロジェクトです。子どもたちも楽しめるように、遊びを取り入れながら自然と親しむ機会をつくっています。

森の再生を目指す活動を始めた背景には、協力隊の2年間があります。大学卒業後、社会人経験を経て25歳の時に協力隊に参加。趣味で続けた吹奏

楽の経験を生かして、ホンジュラスで音楽隊員として活動しました。電気などに頼り過ぎない素朴な暮らしをする人々と親交を深める中、地球規模の環境問題や地域格差に憤りを感じ、同時に緑豊かなふるさととの魅力に気がつきました。

帰国後、自然に携わる仕事が見たいと考え、高島市内で7年ほど自然観察指導員として環境教育に携わりました。その中で、地域の森で次の世代を担うべき幼樹（子どもの木）が激減しているのと知って危機感を抱き、20年に転職して苗木を育てる仕事に就きました。

会社では杉やヒノキなど針葉樹の苗木を中心に育てて販売しています。が、タネカラプロジェクトでは地元で自生する広葉樹や、一般的に名前を知られていない樹木の苗木も積極的に育てています。人にとって価値の低い木でも、森の生態系には大切だからです。

森の多様性を守るアプローチとして、「地域の森は地域の種で」という視点にこだわっています。国や地域で人種や文化が異なるように、同じ樹種でも地域によって形質が異なります。協力隊を経て地元に戻った時、慣れ親しんだやわらかい土の上でほっとしましたが、樹木も生まれ育った土地でこそ元気になるはず。地域固有の遺伝子を守ることが大切です。

23年11月、地道な活動が評価され、



from Palau



同期隊員との出会いをきっかけに パラオの子どもたちへ平和の大切さを 伝える授業を実施

筒井駿樹さん（パラオ／小学校教育／2022年度1次隊・香川県出身）

香川県の小学校での教職を経て、2022年8月からパラオ北部のアルモノグイ小学校で活動しました。主な要請は算数の授業支援で、特に授業が遅れがちな低学年の生徒が足算や引き算などの基礎学力をつけられるよう、指導や助言をしました。それと共に力を入れたのが、生徒たちに平和について考えてもらう取り組みです。太平洋戦争の激戦地だったパラオには、戦跡や遺構が多く残っています。赴任から間もない時期に、私は地域にある旧日本軍の戦闘機や大砲の残骸を引き合いに出し、背景にある歴史や戦争の悲惨さ、戦時中の日本の子どもたちの厳しい暮らしなどについて16人の高学年の生徒たちに向けて話す授業を行いました。もっとも、実のところパラオへ行く以前は、戦争についてどこか他人事のように感じていました。平和教育への意識を強く抱いた背景には、同期隊員の吉田大祐さん（チリ／環境教育）との関わりがあります。吉田さんの大祖父の吉田久光さんという方が、戦時中のパラオでわずか19歳にして戦闘機で墜落して戦死しているのですが、その場所こそが私の任地アルモノグイ州。派遣前訓練中にそのことを聞かされ、墜落の現場を訪ねることを勧められました。

同じ隊次にそのような人がいたこ

とに縁を感じつつ、赴任後すぐに行ってみると、丘の上のうっそうと生い茂った草の中に、戦闘機の残骸が確かにありました。未来ある青年が何を思っただけで死んでいったのかと想像をめぐらせ、実施したのが、それらの戦跡を題材にした平和教育の授業だったのです。

さらに、当時JICA事務所を通じて日本の国際児童画展への出展募集があったので、授業を聞いた生徒の有志に戦争をイメージして思い思いの絵を描いてもらいました。そうして日本へ送った14作品のうち、大砲や戦闘機などを題材に反戦や国際親善のイメージを描いた2作品が入選し、23年に他の入賞作品と一緒に日本国内で順次展覧されることに。同僚の先生たちは「生徒たちが国の歴史や戦跡の由来を知る良い機会になった」と喜んでくれました。

しばしば親日国といわれるパラオですが、戦時中の出来事に複雑な感情を抱く人もいます。学校で戦争について語ることもリスクも考慮し、私が「平和教育」を掲げたのは一連の取り組みが最初で最後。しかしその後、例えば日本文化紹介の一環として戦後の貸本漫画文化に絡め、戦争から平和な世の中に移り変わった時代のことを紹介するなど、平和教育へのつながりも意識した取り組み





はしもとともりの
橋本知典さん

ガーナ/小学校教育/2018年度2次隊・愛知県出身
大学生の時の教育実習先で協力隊経験者に出会った
ことで触発され、大学を卒業した2018年に協力隊員
としてガーナに赴任。コロナ禍による一斉帰国後、
小学校の常勤講師として約1年6カ月勤務。現在は民
間企業の営業職に就いている。

橋本さんは、現地の教育事務所に相当する
ガーナ教育サービス・ジャシカン郡事務所に配
属され、二つの小学校を巡回し教員への技術指
導や授業の改善策の提案などに携わった。その
一環として任期1年目の時、各地の隊員も集め
て各種教科の講座を行う一日がかりのワーク
ショップを開催した。その際に試みたのが、配
属先のカウンターパート(以下、CP)や同僚
らに「英語通訳」として参加してもらったことだ。
実は、普段の巡回活動において、教員との会
話が微妙にかみ合わなかったり、橋本さんの発
した言葉の意味を考える「間」ができてしま
うことがあった。それは日本で教わった英語
とガーナ人の話す英語で発音や語彙が違い、
基本的な意味は通じていても、ニュアンスがうま
く伝わっていないためだった。
ところが、「ある時、その場にいたCPが僕
の話した内容をペラペラッと英語で補足する
と、皆が納得の表情をしたことがありました」。
これをヒントに、ワークショップでは橋本さん
の英語に慣れているCPらに通訳を依頼。事
前に文面の資料を渡し、入念な打ち合わせを
行って当日に臨んだ。

「ガーナ人のCPたちのほうが現地の人の「ツ
ボ」を心得ていて盛り上げ上手なこともあり
ワークショップは大盛況。教員側からの質問
も普段の巡回時より増えました。自分の語学
力を改善するのはもちろん大事ですが、周り
の人にうまく頼って意思疎通を補完するのも



「通訳」を活用してワークショップを盛り上げた橋本さん。「言葉の壁による
ストレスがなくなったことで、参加する先生たちの集中度や安心感が増し、
質問なども増えました」

「学生時代から英語が苦手で、派遣前訓練中は
語学で精いっぱいでした」と振り返るのは英語
が公用語のガーナで小学校教育隊員として活動
した橋本さんだ。危機感を持つて臨んだ訓練で、
語学の先生に授業外に自室でできる勉強法を尋
ねたところ、勧められたのは「短くてもいいから、
英語の日記を書くこと」。訓練中、毎朝先生に添
削してもらって続けただけでなく、ガーナへ赴
任してからも習慣として続けた。
「まず、その日にあった出来事で人にしゃべり
たいようなことを日本語の短文でざっと書いて
みます。それを試行錯誤して英訳するのですが、
自分自身が言いたいことや伝えたいことなので
『こういう表現で、自分の伝えたいことを言える
のか!』と意識に残ります」
もちろん、任地に行ってからでは添削を受
ける機会はなかったものの、教科書などで受
動的にインプットするよりも言葉の定着度は
高かったという。

ニュアンスがうまく伝わらない? 英語↓英語の「通訳」で打開

Case 1 英語

英文日記で苦手な英語を克服 あえて通訳を介した活動も

有効なものではないでしょうか」
この取り組みはその後、ガーナ隊員のワーク
ショップツアーのモデルケースにもなったが、
思わぬ副産物もあった。「事前に資料を読み込む
ので、僕たち教育系隊員がやるうとしていた活
動内容を、配属先の人によく理解してもらった機
会になりました。さらに、CPだけでなく何人も
同僚に通訳という形で当事者として参加して
もらったおかげで、現場の盛り上がり配属先で広
く共有され、その後は職員たちの士気も上がるな
ど、単に自分の語学力を補完するだけでなく、ま
ず、良いことづくめの試みだったと思います」。



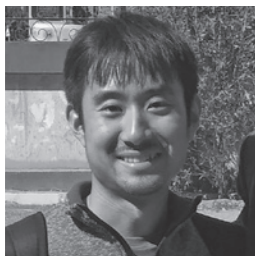
特集

任地での活動を充実させる!

語学力の伸ばし方& コミュニケーションの工夫

協力隊員が任地での活動や生活を送る上で不可欠なのは、現地の人と仲良くなること。そのためにも、「言語」をしっかりと身につけて意思疎通を図りたいところですが、なかなか思うように聞いたり話したりできるようなにはならないものです。今回の特集では5人の先輩隊員の方々に、現地での語学力のブラッシュアップや、ローカルな言語の習得、コミュニケーション方法の工夫など、任地での活動を円滑にするために取り組んだ手法を伺いました。派遣国や配属先の条件によって有効な手段は千差万別なので、ここでピックアップした事例を参考に、自分だけのやり方を見いだしてほしいと思います。

Text = 梶垣由利子(P7-9)、海原美帆(P10-11)、飯淵一樹(P6、P12-13 本誌) 写真提供 = ご協力いただいた各位



くろまつくによし
黒松邦至さん

スーダン／環境教育／2018年度1次隊、エジプト／環境教育／2019年度8次隊・奈良県出身

2018年7月に新卒で環境教育隊員としてスーダンに赴任。翌年4月、社会情勢不安によって退避を余儀なくされ、日本での一時待機後、エジプトへ任国変更となる。コロナ禍で帰国し、IT企業での勤務を経て、現在は教育関係の仕事に就いている。



用意した紙芝居を見せながら話す黒松さん。クイズなど、あらかじめ準備できるアクティビティも活用して授業に臨んだ

黒松さんへの要請は首都ハルツーム近郊のユースセンターで環境意識を啓発することだったが、スタップたちの環境教育への関心やニーズは乏しかった。そうした中で黒松さんは、まずスタップたちとの関係づくりを図る傍ら、先輩隊員が活動する小学校で、生徒に環境教育のプレゼンテーションなどをする機会を得た。

ただ、ゴミの分別の仕方のように簡単なことはアラビア語で話せても、詳しい理由までしっかりと説明するだけの語学力はまだなかった。しかも、「訓練所で学ぶフォーマルな正則

「紙芝居などを作る中で、現地語の語彙が増えたという実感がありました」。具体的に伝えたい内容を考えて試行錯誤するからこそ、調べた単語や表現が深く身についたようだ。

「アラビア語は全くの初心者だったのですが、大学時代にスペイン語とフランス語を学び、英語を含めて簡単な会話はできていたので、自分に向けた語学の学び方を生かしました」と語る黒松さん。その勉強法とは、目で覚えることである。日本人にはなじみのないアラビア文字だが、頻繁にテキストを開いては単語を目に入れることを繰り返した。

「ほんの1分の空き時間でも、アラビア語の単語や文を眺める回数をとにかく増やすことで、その『形状』を頭に焼きつけてしまうイメージです」

その上で、覚えた内容の中で反すうしながら他のことを行い、またテキストを開いて単語を見ることを反復すると、一層よく定着したという。

加えて、「訓練所の語学クラスの先生から定型文をアラビア語と日本語で交互に読み上げた音声データももらったので、それを四六時中、聴くようにしていました」。

目と耳からのインプットを合わせてアラビア語の基礎を身につけ、スーダンへと赴任した。

授業を切り切るための教材作りが語学上達のきっかけに

そこで考えたのが、あらかじめ内容の決まった紙芝居を用意することだ。『ゴミをポイ捨てすると、プラスチックなどは自然分解されない』といった内容をイメージした絵を数枚描き、「伝えたいことをまずは日本語の文で取りまとめてからアラビア語に訳し、すらすら読めるよう、紙芝居の裏側にローマ字で読み方を書き込みました」。そして、子どもたちからの質問に答えられるようにアラビア語の想定問答も徹底的に考えるなど、「とにかく準備をしっかりして臨むことを意識していました」。

完璧とはいえない語学力で授業の体裁を最低限でも整える工夫として取り組んだ資料作りだったが、意外にも、それ自体が語学力の向上にもつながったという。

Case 3 アラビア語

インプットに注力して覚えたアラビア語 現地では実践を通じて語彙力アップ

技術指導が活動の中心とはいえ、講義や説明の内容が伝わらないと授業への身が入りにくく、常に通訳できる生徒がそばにいても限らないので、フランス語のわからない生徒の興味が保てないのではないかと危ぶんだ小笠原さん。民族にかかわらず、多数派であるソマリ語ならばたいていの生徒が理解できたので、「自分がソマリ語を覚えたほうが手っ取り早い」と考えた。

「持ち歩きやすいように、単語帳は1冊だけに限定するのがお薦めです。どこに何を書いたかすぐわかるよう、『時制』『数字』『挨拶』『定型文』『頻出単語』といった項目を立ててペー



公用語のフランス語にソマリ語を交えて生徒への指導に臨む。言葉を覚えようと積極的に周囲へ質問すると、相手も何とか教えようと頑張ってくれたという

2018年から服飾隊員として、職業訓練校であるジブチ女性連合の縫製コースに派遣された小笠原さん。着任するとすぐに10代後半から20代前半の生徒が学ぶクラスを受け持つことになり、ミシンを使った縫製などの指導に取り組んだ。

ところが、ジブチの公用語として派遣前訓練で学んだフランス語で授業をしていると、「ある生徒がクラスメイトに現地語で通訳しているのを見て、フランス語を理解できない生徒がいることに気づきました」。

ジブチは、公用語であるフランス語・アラビア語のほか、現地語のソマリ語とアフール語の4言語が混在する国で、特にソマリ系の国民が多い。職業訓練校は首都にあつたものの、同じ民族だけが集まって暮らしている郊外の町や村からバスで通ってくる生徒も多く、クラス全体の2〜3割の生徒はフランス語が理解できないようだった。

積極的な質問と手作り単語帳で慣れないソマリ語に挑戦

ソマリ語は赴任直後の現地語学研修で学んでいたが、フランス語話者の先生に3週間ほど教わっただけなので、ほとんど身についていなかった。そこで小笠原さんが取り組んだのは、ひたすら周りの人に言葉を聞いて回ることだった。配属先の同僚の先生や生徒にも、「今、何て言ったの?」とその都度ソマリ語の単語を覚えてもらうよう心がけ、市場などでも目の前の品物を指差しながら、「これは何?」とためらわず何でも質問した。

「日本人の私からグイグイ声をかけると相手も『おっ?』と興味を持ち、意外に面倒見よく対応してくれました」

そんな中でお守りのように携帯していたのが、ポケットサイズの自作の単語帳。教材になるソマリ語のテキストがなかったため、使えるところだけソマリ語の言葉を自分でまとめたもので、生徒に頼んでソマリ語のつづりを書いてもらうこともあった。

自分なりの方法で現地語に挑んだ小笠原さん。生徒との距離感を縮めることに成功し、信頼関係を築いていった。

「紙芝居などを作る中で、現地語の語彙が増えたという実感がありました」。具体的に伝えたい内容を考えて試行錯誤するからこそ、調べた単語や表現が深く身についたようだ。



おがさわら ゆな
小笠原和佳奈さん (旧姓 樋口) さん

ジブチ／服飾／2018年度1次隊・茨城県出身

服飾関係の大学に在学していた時に、説明会で協力隊に関心を持つ。実務経験を積むため、母校で助手として5年間勤務しながら、フリーランスのデザイナーとしても活動。2018年に協力隊員としてジブチに赴任し、帰国後は通信制高校で働く傍ら、フリーランスのデザイナーも続けている。

Case 2 フランス語・ソマリ語

公用語のわからない生徒のため 現地語を学んで活動

2018年から服飾隊員として、職業訓練校

積極的な質問と手作り単語帳で慣れないソマリ語に挑戦

ジブチをしていました」

それでも、ソマリ語だけの文章をすらすら話すまでには至らなかったが、「フランス語とソマリ語は文法が似ています。フランス語の文章にソマリ語の単語を交えて置き換えるだけでもかなり理解してもらえました」

クラスでソマリ語を交えて指導し始めると、生徒からの質問も目に見えて多くなった。「手工芸品の写真を持ってきて、自分もこれを作りたいと相談してくれる生徒も出てきました」。

自分なりの方法で現地語に挑んだ小笠原さん。生徒との距離感を縮めることに成功し、信頼関係を築いていった。



ホワイタクマクファレイン美樹 (旧姓 岩月) さん
グアテマラ/コミュニティ開発/ 2018年度1次隊・岡山県出身
中学時代にニュージーランド、高校時代にカナダへ短期留学。大学時代にもアメリカへの1年間の留学を経験した。2018年よりグアテマラ郊外の村落に派遣され、観光開発などに携わる。現在は熊本県山都町に移住し、地方創生に関わるコンサルティングの仕事に就いている。



高知尾明彦さん
SV/ネパール/交通安全/ 2016年度1次隊・神奈川県出身
家庭教師や塾講師、学習塾経営からタクシー会社に転職し、21年間運行管理や乗務員教育に携わる。協力隊として活動した妹夫婦の経験を聞きJICAの活動に興味を持つ。定年を前に自分の経験を海外で生かしたいと考えて応募し、62歳で退職してSVとしてネパールへ。帰国後も東京五輪のボランティアや、NPO法人「シニアボランティア経験を活かす会」主催の日本語支援教室や小中学校の日本語初期支援に参加するなど積極的に活躍している。

Case 4 ネパール語

赴任して直面した会話の困難 地道な勉強と工夫で乗り切った2年間

62歳で一念発起してシニア海外ボランティア(以下、SV)に応募した高知尾明彦さん。派遣国はネパールで、訓練所で学ぶのはネパール語である。ただ、同じ隊次でネパール語を学ぶSVは高知尾さんを含む2人だけだった。担当の講師ともう一人のSVは英語が堪能で、高知尾さんも塾講師時代に英語を教えていたので基本的な会話はできた。それで講師も英語による説明が中心となり、結果的にネパール語での会話練習が少なかった。赴任後の現地語学研修も同様で、「文法は理解できても、会話練習がおろそかになりました」。

高知尾さんへの要請は、ネパール警察首都圏交通警察局で交通安全に関する助言や啓発活動をするに当たった。上級職員やCP以外は英語を解さない職員が多かったため、活動ではネパール語を話すようCPから求められた。

「運転免許教本などもネパール語で書かれていますが、何をすることもネパール語でやりとりする必要に迫られました」

そこで、現地の語学研修で通った語学学校で個人レッスンを週2回受けることに決めた高知尾さん。活動も始まっているので、交通安全に関する内容に絞った実践的な勉強を意識した。

「ネパール語の運転免許教本や交通事故のニュース記事・動画を用意して、『この言

葉の意味は? 読み方は?』と尋ねては英語に訳してもらい、同時に現地の交通事情も学びました。プレゼンなどの資料を作成する際には、日本語でまとめた情報をいったん英訳し、それを先生にネパール語訳してもらうなど、試行錯誤しながら語学習得を活動と並行して行いました」。

つれて言葉以外の情報による洞察も働くようになったという。

「赴任から1年を過ぎる頃には、言葉だけではわからない部分を相手の目や表情から推測できるようにになりました。また、知人のネパール人作家の絵本を英語から日本語訳する作業を手伝う機会があり、ネパールの民話を通じて宗教や価値観を知ることができたのも、現地の人の気持ちや考えを類推する助けになったと思います」

語学力は当然大切だが、文化・習慣など背景の知識を深めるのも、有効なコミュニケーション手段といえそう。



交通警察内のFM放送局で働く警察官と。高知尾さんがネパール語で用意したドライバー向けの交通安全メッセージも、ラジオで放送された

Case 5 スペイン語

現状の語学力に甘んじずレベルアップを図り 任地外で非日常的な言葉も学習

高校時代から憧れていた協力隊にホワイタクマクファレインさんが応募したのは23歳の時。特に引かれたグアテマラの案件があったのだが、まだ社会経験も実務経験も浅く、語学という武器があれば合格の可能性が高まるのではと考え、応募書類の提出と同時に自らスペイン語の学習を始めた。

「1コマ30〜40分ほどのオンライン授業を週に2、3回程度、出勤前に受けていました。その後合格が決まって派遣前訓練に入る前まで、半年ほど続けました。訓練所に入ってから、単語を覚えるのに自分の記憶や思い出とひもづけると定着しやすいと考え、特に身の回りにある物や『自分が感じている感情』をスペイン語で言えるようにいつも意識して過ごしていました」

早くから熱心に勉強したかいあり、グアテマラ赴任後の現地語学研修では、早々に現地の人の言葉をおおむね聞き取れるまでになっていたという。

ある日気づいた伸び悩み 語学学校通いが活動にもつながる

語学力の伸びに手応えを感じながら、任地での活動を始めたホワイタクマクファレインさん。要請は、グアテマラの古都アンティグアの



国外のNGOと共に任地で実施したコミュニティツーリズム会議にて。開催側として中南米各国や北米、欧州からの参加者をもてなした

郊外に位置するサンクリストバルエルアルトという人口数百人ほどの村での観光開発。村で暮らしながら順調に人々の間に溶け込んでいったのだが、3カ月ほどして壁に直面した。「スペイン語力が研修時から伸びていないと気づいたんです。特にアウトプットする時に、同じ単語や言い回ししか使えていない。限られたコミュニティでは毎日同じようなことしか話しませんし、住民たちは完璧でない私のスペイン語に慣れ、間違っただけでも合わせてくれるようになっていました」

観光開発の活動を発展させるには、自治体や国の役職のある人たちとのやりとりも必要にな

る。「伝わればいい」レベルの語学力では話を聞いてもらえないと考え、空いた時間にアンティグア市街の語学学校へ通うことに決め、グループレッスンを受け始めた。そして先生の勧めで、スペイン語検定の一つ、DELE[®]の勉強を通じてビジネスやオフィシャルな場で用いられる表現を重点的に学習するようにした。

「経験上、興味のある内容はとても覚えが早いので、同じビジネススペイン語を学ぶにしても例えは『スポーツビジネスのテーマで教えて!』と自ら教材を持ち込みました」

アンティグアの街中に出た際には、アウトプットする相手を増やそうと街の人に積極的に話しかけて交友関係を広げ、任地以外の人が話すスペイン語にも触れ続けたホワイタクマクファレインさん。赴任から1年ほどたつ頃には行政の担当者らとの会合にも不安なく臨めるようになった。さらに、アンティグアの友人や知人に込み入った話をできるようになったおかげで、村への観光客誘致のPRに協力してくれる人も現れ、一石二鳥の成果を得た。

「伝わりやすいからと身近な人とはかり話すのではなく、多様な立場の人と話すことが大切だと実感しました。隊員の任期は決して長くないので、早く、積極的に人々の間へ入っていくのが間違いなく有利だと思います」

※ DELE...スペインの教育・職業訓練・スポーツ者が定めるスペイン語検定試験で、「Diplomas de Español como Lengua Extranjera (外国語としてのスペイン語免状)」の略称。



Case 3

黒松さんの場合 [アラビア語]

青年海外協力隊訓練所でもらったアラビア語テキスト語学の勉強で後々まで一番使ったのは、訓練所で配布されたテキストです。任地へ行ってからも何度も見直して、ボロボロになるまで使い込みました。内容の完成度が高いのはもちろんですが、2カ月半の訓練で使い慣れていたことも大きいです。新しいテキストをあれこれ買うより、同じものを繰り返し見ること完璧に使いこなせるようになったほうが良いと思います。



Case 1

橋本さんの場合 [英語]

YouTubeの洋画解説チャンネルなど

僕が好きなのは「Rupa sensei」という、洋画のワンシーンのセリフを解説しているチャンネルです。発音記号だけでなくカタカナに落とし込んで発音を教えてくれるのがわかりやすいですし、映画のシーンなので格好よくて、自分も使ってみたいと思います。

英語学習アプリ『レシピー』

英語のニュース記事を紹介してくれるのですが、中には日常生活ではあまり出てこない難しい表現も出てくるので勉強になりました。記事によっては日本語訳もついていて、見比べながら学ぶこともできるので面白いと思います。

<https://note-recipe.polyglots.net/> ▶▶▶

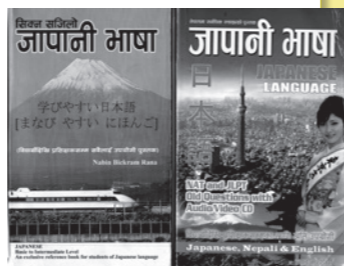


Case 4

高知尾さんの場合 [ネパール語]

現地で販売されている辞書や参考書

日本語-ネパール語の辞書は日本国内で流通していなかったため、赴任後に見つけた英語-ネパール語の辞書を使っていました。また、技能実習や留学で日本へ行くネパール人のための日本語テキストもネパール語の勉強に役立ちました。



『ライター miyachika のネパール暮らし blog』

ネパール人男性と結婚してネパールに住んでいる日本人の方のブログです。ネパールの文化や生活についての情報が得られました。

<https://miyachika-pokhara.com/> ▶▶▶



先輩たちのお薦めする 語学参考ツール

今回お話を伺った皆さんに、自身が語学の勉強で活用したツールを
教えていただきました。



Case 5

ホワイトマクファレインさんの場合 [スペイン語]

スマートフォンの変換アプリ

私は「SpanishDictionary.com」という、英語-スペイン語の翻訳アプリをよく使っていました。文法上、日本語をスペイン語に変換すると変になってしまうことが多いので、英語ができる人にはこうしたツールが使いやすいと思います。

<https://www.spanishdict.com/> ▶▶▶



Netflix などの動画配信サービス

映画やドラマを、まずスペイン語の音声・字幕で見て、2回目は自分の理解が合っているか確認するため字幕だけ日本語か英語にして見るようにしました。特に自分の語学レベルを上達させるにはビジネス的な難しい表現が出てくるジャンルがお薦めで、私は個人的な好みもあって医療モノ・刑事モノをよく見ていました。



Case 2

小笠原さんの場合 [フランス語・ソマリ語]

『フラ語入門、わかりやすいにもホドがある! [改訂新版]』

(清岡智比古・著、白水社)

ソマリ語は現地で体当たりに覚えました。フランス語は日本にいる時から入門書なども買っていました。この本は本当に基礎的な文法を扱っていて、しかもフランス語の発音がカタカナで書いてあるので初心者にも優しいと思います。読み手に話しかけるような文体で説明も親しみやすく、訓練所でフランス語を学んでいた同期の多くが「コレはいい!」と太鼓判を押していました。

<https://www.hakusuisha.co.jp/book/b472214.html> ▶▶▶



／ お話を伺ったのは ／



アンドウ・ラランブさん

Ando Ralambo
JICAマダガスカル事務所 ナショナルスタッフ

PROFILE

マダガスカルアナラマンガ県出身。社会学部で地域開発学を学んだ後、教育支援NGOに参加。ボランティア教師として、英語やクリティカルシンキング(批判的思考)を教える。その後、同NGOにてプロジェクトマネージャーとして基礎教育事業に関わる。日本への興味などから、JICAプロジェクトで5年間、会計を担当。2022年から現職。



20メートルを超える高さになるほど大きなバオバブの木(写真提供=竹村祐哉さん)

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈マダガスカル〉

マダガスカルは、アフリカ大陸の南東にある大きな島国。多様な生物にあふれた可能性の国。

マダガスカルの基礎知識

<p>マダガスカル共和国</p> <p>面積：約58万7,295平方キロメートル (日本の約1.6倍)</p> <p>人口：2,843万人(2021年、世界銀行)</p> <p>首都：アンタナナリボ</p> <p>民族：アフリカ大陸系、マレー系、部族は約18 (メリナ、バチレオほか)</p> <p>言語：マダガスカル語、フランス語(共に公用語)</p> <p>宗教：キリスト教、伝統宗教、イスラム教</p> <p><small>※2023年3月現在 出典：外務省ホームページ https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/madagascar/</small></p>	<p>派遣実績</p> <p>派遣取極締結日：2000年10月2日</p> <p>派遣取極締結地：アンタナナリボ</p> <p>派遣開始：2002年12月</p> <p>派遣隊員累計：257人</p> <p><small>※2024年3月31日現在 出典：国際協力機構(JICA)</small></p>
---	---

控えめで、真面目で、日本人と似ている？ 派遣開始から20年余りで評価と信頼が定着 コメを主食とするところが日本と共通しているほか、マダガスカル人の性格や行動には日本人に似たところが多いという。派遣の歴史は長くないが、その存在感はすでに大きい。

マダガスカルはアフリカ大陸の南東に位置し、世界で4番目に大きな島だ。8000年以上前に他の大陸と切り離されたことから、独自の進化を遂げた生物が非常に多く、同国の動植物の80パーセントが、世界でここにしか生息していない「固有種」といわれる。15世紀以降、ヨーロッパとの交易で栄えたが、1885年にフランスの植民地となり、1960年に独立した。協力隊の派遣開始は2002年と比較的新しく、現在は「農業・農村開発」「保健」「教育」「青少年・人材育成」の4分野が中心だ。JICAマダガスカル事務所ではボランティア事業を担当するアンドウ・ラランブさんは「マダガスカルで協力隊のことはよく知られています。中でも教育と農村開発への期待と評価が高いです」と話す。マダガスカルでは、教員が足りないこともあり、小学校では1クラスに60人から80人の児童がいる。資格がなくても研修だけで教員になることができ

るため、特に地方では教員が「最後の就職口」となっている。ひたすら覚えさせるだけの授業も多いという。「隊員たちは、ただ『2+2=4』と書くのではなく、最初に2つのリングの絵を見せて、続いてもう2つを見せると、合わせると4つになる、などと教えます。紙芝居や積み木で遊びながら学ぶこともあります。だから、子どもも理解しやすいのです」。隊員の活用した教材や実践の記録は、現地の教員たちの間でもしっかりと引き継がれるという。

農村開発では、日本の戦後の経験も生かした「生活改善」が人気だ。石を並べただけのかまどの代わりに、内部に火と熱を閉じ込める「改良かまど」や、泥や草、木炭の粉などから作る「泥炭」の普及が進められている。「環境保護につながる上、農家の負担も減ります。泥炭を売れば収入も増えます」。保健分野では、協力隊員が発案し、有名歌手との協力から生まれた「手洗

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈マダガスカル〉

はばりゆうぞう
羽原隆造さん 村落開発普及員／2004年度3次隊・奈良県出身



PROFILE
教育学部卒業後、教育関連会社に勤務。友人を訪ねてタイを訪れ、貧困といわれる国で住民が楽しそうに暮らしている姿を見て、自分の想像と違って驚く。その後、東南アジアを旅行する中で貧困の現実も知り、生活者の視点で現地を見たいと協力隊に参加。隊員活動終了後、国際理解教育などを経験し、現在はマダガスカルでJICA専門家として稲の収量拡大を展開。技術を学んだ農民がさらに多くの農民を育てる手法で成果を上げている。マダガスカル研究懇談会所属。



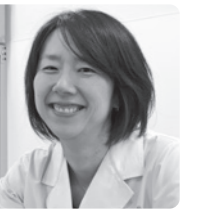
離任時に稚魚生産農家にビデオと技術本を渡した



写真のキツネザルなどの哺乳類、鳥類、昆虫、植物の野外調査を行った

もり
森さやかさん 生態調査／2002年度2次隊・北海道出身

PROFILE
帯広畜産大学に在学中、経験者やJICA職員の話に触れる。特に隊員としてマラウイ派遣中の研究室OBから定期的に送られてくる絵葉書や、一時帰国の際に主食の「シマ」を振る舞ってもらいながら聞いた体験談にも心を動かされる。大学院修士課程で野生動物の生態学を学んだ後、協力隊へ。帰国後、東京大学大学院博士課程で動物生態学の研究を継続した。日本野鳥の会職員や国立科学博物館研究員を経て、現在、酪農学園大学准教授。マダガスカル研究懇談会所属。



成長続ける国で
起し続けた変化
新しい国だけに知識や経験の不足もあった。ギャップを埋めると改革は加速した

キーパーソンと出会い
動植物園の研究・教育を強化

大学院の修士課程で野生動物の生態を研究していた森さやかさんは2002年12月、マダガスカルの首都アンタナナリボの国立チンバザザ動物園に生態調査の初代隊員として着任した。もともとは半年前に着任予定だったが、政変のため派遣が遅れた。同期は派遣国を変更したが、森さんはマダガスカルが世界でもここにしかない動植物（固有種）にあふれた国で、他に生態調査の要請がなかったため、「機会を逃したくない」と派遣再開を待った。

「マダガスカル政府は、固有の生態系が国の財産であると認識していました。また、マダガスカル人だけで研究や教育を進めるのは難しいとも考えていました」と森さん。そのため、各国の研究者がマダガスカルと共に研究し、研究成果も共同で教育の場に還元していく方針が採られていた。

シートで覆っていた。建設費用は、一般社団法人協力隊を育てる会の「小さなハートプロジェクト」などの支援制度を活用した。

彼女を通じて、動植物園が国内外の研究者や団体とどんな共同研究を進めているのかも把握でき、自分の専門を生かせる研究には2週間から1カ月間、同行した。「新種かと疑われる鳥がいる」との情報で、生息地を何度も調査した。日本の国立科学博物館などにも相談して新種の確定に必要なデータ収集やDNA採取の準備もしたが、捕獲には至らなかった。

帰国時に「日本人として、日本の動植物の保全に力を入れたい」と考えた森さんは、日本で鳥の研究を続けた。博士課程修了後、国立科学博物館ではDNA調査について教えてくれた研究者の下で勤務し、現在は大学で鳥類の保全に関わる教育研究を進めている。

農家の熱意に応えたい
収入向上へコイ養殖を軌道に

途上国の現実に向き合いたいと考えた羽原隆造さんは2005年、村落開発普及員の職種でマダガスカルに着任した。

配属先は、首都アンタナリボから約500キロメートルの山間部にある、ババテニナ市の市役所。要請は、先代隊員が始めた養鶏とコイの養殖を

同園は研究・教育の拠点で、要請では、その活動全般を支えることが求められていた。一方で具体的な内容は少なく、森さんは人間関係をつくりながら、課題の把握にも努めた。

動植物園内では森さんの専門である鳥類の担当グループと一緒に、日々の鳥の飼育施設の掃除や整備、餌の用意や餌やりをした。警備員や園内施設の整備員とも挨拶を交わし、世間話をした。やがて、園のみんなに頼りにされている動物の栄養士の女性と親しくなった。知識も豊富で、人柄も良く、研修で日本の上野動物園などを訪れたこともあった。

「自分の得意なこととか、やりたいこととか、いろんなことを彼女に話しているうちに、園が抱えている課題を教えてくれたり、『こういうことならできるんじゃない』と一緒に考えてくれたりするようにまりました」

彼女に教えられた園の課題の一つが、展示している動植物の説明看板がほとんどなく、種名すら十分に紹介されていないことだった。そこで森さんは、ドイツの鳥類園からの派遣員と協力して説明看板の製作と設置を進めた。解説はマダガスカル語で、名称や学名は英語とフランス語を加えた3カ国語で表記した。

時々展示する動植物の入れ替えがあることから、プリンターで印刷してすぐに差し替えできるように、JICAを通じて、農民たちの収入向上と栄養改善を行うことだった。

しかし、着任してみると、養鶏事業は失敗していて、コイの養殖もほとんど広がっていないかった。市役所の中に事業を担当する部署もなく、他の担当者もいない。カウンターパートとなる市長からは「自由にやってください」と一任された。

コイ養殖は、田んぼに稚魚を入れ、成長させる。稚魚は雑草やプランクトンを食べながら大きくなり、コイの排泄するフンがコメの肥料にもなるという農法だ。

普及のため、羽原さんはアンタナリボでJICA専門家（水産）に魚の養殖に詳しいマダガスカル人を紹介してもらい、各村で講習会を開くことにした。協力隊に参加する前、企業で広報やマーケティングを担当していた経験を生かし、講習会前にはラジオで告知を流し、参加者を集めた。ラジオは効果的だった。

より効率的に事業を広めるため、羽原さんは、コイの飼い方など、講師の説明を録画し、編集して、ビデオ教材を作り、村々で上映することを考えた。「村の中で何軒か、電気を使えて、テレビを持っている家がありました。そこに集まってテレビを見るのが、住民の娯楽の一つでした。そうした家に乗り込んでいって、『こんなビデオがあるけど、見ない？』と講習のビデオを



展示する動植物の説明書きをラミネート加工も施して作成した

に隊員活動支援経費を申請して、ラミネート加工ができる機械も導入した。現地では当時、「ラミネート屋」に依頼するのが一般的だったため、自分たちが作りたい時にラミネート加工できる機械は重宝した。

「展示は動植物園の基本。マダガスカル人に自国の財産である動植物のことを知ってほしいと思っていたので、小学生などが園を訪れた際に見てもらえるようになってよかったです」

動物の隔離小屋を作ったのも、上野動物園で同様の施設を見た彼女の助言が発端だった。

同園では、新しい動物を園の環境に慣れさせたり、病気になった時に隔離したりするための施設がなく、必要な時には展示スペースの一部をビニール

勧めました」

自転車や、時には徒歩で2時間かけて村を回った。そうした中で、住民からこう聞かれることがあった。

「次の稚魚はいつ売ってくれるの？」

コイ養殖では、稚魚の調達が一番のボトルネックだった。稚魚は遠方から調達するため、数も少なく、高価だったからだ。

現地で稚魚生産すれば、周辺の住民に格安で販売することができる。そうすれば、もっとコイ養殖を広げることができると考えた。稚魚生産のためには、田んぼの周りの土手を高くして専用の池をつくり、ヤシの繊維を設置、親魚にそこで産卵させればよい。

羽原さんは、「稚魚をつくらう」と声をかけ、協力してくれる農家を探した。賛同してくれた農家にはマンツ



羽原さんがコイの産卵用にヤシの繊維で作製した装置

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈マダガスカル〉

菊池千登世さん

コートジボワール／音楽／1993年度2次隊、幼児教育／2021年度1次隊・千葉県出身



PROFILE

小さい頃から、「協力隊はいいぞ」と父に聞いて育つ。協力隊での派遣を意識して音楽大学に進学。新卒で協力隊に参加し、コートジボワールで音楽隊員として活動した。帰国後、結婚、出産の後、子育て中に資格を取り保育士に。子育てが一段落し、再度協力隊に参加、マダガスカルに派遣中。もう一度海外で働きたいという夢を実現した。



菊池さんが巡回する保育園で指導する先生たち

竹村祐哉さん

青少年活動／2018年度1次隊・京都府出身

PROFILE

大学生の時、カンボジアに行き、地雷原やトゥール・スレン虐殺博物館を見て悲惨な歴史を知る。海外へ行ってさまざまな世界を知りたいとの気持ちは強く、教職のキャリアと両立できる選択肢として、協力隊への参加か、日本人学校での勤務を意識するようになった。より現地の人に関わると、現職教員特別参加制度を利用して協力隊に応募した。復職後も、マダガスカルについての情報発信や授業を続ける。



ラジオ番組に出演すると、巡回先の先生方からより認知されるようになった

活動の舞台裏

現地に溶け込むコツ

人間関係をつくり、現地に溶け込むためには、どうするか？青少年活動隊員だった竹村祐哉さんは、先輩隊員からのアドバイスも受けて、いくつもの方法を実践した。最初にやったのは、自分の写真入りの名刺を作ること。これを配属先の同僚や巡回する学校で配った。渡す際、相手に「写真を撮らせて」と声をかけ、スマートフォンで一人ひとりの写真を撮り、「名前も教えて」とお願いした。こうして、顔と名前を覚えた。



1 大家さん一家と
2 赴任時に配った名刺

学校長にはメールアドレスと電話番号を覚えてもらうこともした。「訪問する前々日か前日にメールを送ると、『待ってるよ』とか『その日はいないけど、他の先生に伝えておくよ』などと返信が来ました」。マダガスカル語の習得も必須。先輩隊員から代々受け継がれてきたエクセル辞書に使える言葉を足して、約5000以上の単語・例文集を作った。一人暮らしだったが、現地語の習得のため、最初の数カ月は大家さんにお金を払って食事を出してもらい、食事前や食事中、家族と一緒に会話しながら言葉を覚えた。「町の屋台より少し高いくらいの料金でしたが、言語だけでなく、現地の生活に慣れましたし、お代わりも自由だったので、高くは感じませんでした」と振り返る。

マンで池のつくり方や産卵の方法を指導した。メス1匹と、オス2〜3匹を池に入れると、やがて大量の稚魚がえった。それを村内や近隣の村で売ると、取り組みは広がっていった。

羽原さんは協力隊の任期満了後、一時期、日本で国際理解教育に関わったが、その後にマダガスカルに戻り、バイオ燃料の原料となる木の植林事業を経て、現在はJICA専門家として稲作技術の普及・向上に尽力する。そこには、ある思いがある。

「マダガスカルの人々は本当に真面目なんです。大変な農作業も、そのための工事も、一生懸命やります。だから私も、こうやったらもつとうまくいくという方法を伝えたいと思うんです。給食があれば、食事の前に手洗いを指導することもしやすいが、現地の学校では給食がなかった。竹村さんは、学校を巡回しながら、「トイレの後は手を洗おうね」「ご飯は手を洗ってから食べようね」と繰り返した。しかし、同じ学校に行くのは1〜2カ月に1度ということもあり、習慣化は難しかった。

そこで考えたのが、「手洗いソング」の活用だった。マダガスカルでは、かつて隊員が作った手洗いソングを現地の有名歌手が歌い、国民的に知られるようになっていた。この曲に乗せてダンスを踊るビデオがインターネットにアップされていたため、そこに手洗いの手順を加えたのだ。「1番は手のひら、2番は指と指の間、3番は爪、4番は手の甲、5番は手首、最後に手を乾かさう」などと前奏部分に乗せた。効果は、明らかだった。竹村さんが学校に行くと、「覚えて？」と聞くと、子どもたちは何度も歌って踊ってみせてくれた。こうした竹村さんの活動の後押しになったのは、偶然の出会いから始まったラジオだった。

ある日、町で、竹村さんの前任の看護師隊員とも活動したこともある、乳児の健康管理員を担っている女性と会った。そして女性に誘われ、女性が出演している地元のラジオ番組「栄養満点レシピ」に週1回出演し、栄養素について話すことになった。ラジオの聴取率は高く、初めて行く学校や、自転車と徒歩で1時間半かかる離れた学校でも、先生方から「ラジオに出てくれる人ね」「聴いたことあるよ」と言われるようになった。「前もって自分のことを知ってもらっているのは大きかったです。現地に日本人は僕だけでしたが、『誰？』と警戒されることはなくなりました」

コイから木、そしてイネへと対象は変わりましたが、僕のその思いは変わりません」

マダガスカルでは、安全な水やトイレが使えない人も少なくない。そのマダガスカルで、子どもたちの健康・保健啓発活動に取り組んだのが青少年活動隊員として2018年に着任した竹村祐哉さんだ。配属先は首都アンタナナリボから車で5時間ほどのヴァキナンカラチャ県ベタフ郡学区事務所。要請は、健康・保健活動と、図書文化推進センターの

センターの図書館での活動では、日本文化の紹介のほか、スタッフに整理整頓なども伝え、活動を終えた。帰国後、教員に戻った竹村さんは、毎月、「マダガスカル新聞」を作成し、アプリで全校生徒と保護者に送っている。さらに昨年度、帰国後初めてマダガスカル人と共に授業を行った。

先生たちのやる気引き出し「楽しい」の連鎖で幼稚園改革

かつてコートジボワールで音楽隊員として活動した菊池千登世さんは2021年9月、マダガスカル首都郊外のアンブジャチムへ着任し、幼児教育に新しい風を吹き込んでいる。要請内容は、数やアルファベットを楽しく学ばせるなどの新しい指導法を紹介し、現地教員の指導力向上に貢献

図書館での日本文化紹介の2本柱。かなり異なる内容だったため、竹村さんは、午前中は小学校を巡回して健康・保健啓発活動を行い、午後は同センターの図書館での活動というスケジュールで活動した。

保健の活動に取り組むにも、どれくらいの子どもたちが手洗いや歯磨きをしているのか、そもそも歯ブラシやせっけんがあるのかもわからなかった。そこで、こうした状況の確認から始めることにした。活動エリアの子ども約250人を調査したところ、手洗いをしている子、歯磨きをしている子は半数以下で、習慣にはなっていないことが確認できた。歯ブラシを持っていない子や家に

すること。担当する五つの公立幼稚園を訪ねると、園児たちは長時間、ずっと席に座っていた。そして、ただ先生の話の聞いていた。読み聞かせの時間も、ただ先生が読み上げる物語を聴くことだけだった。菊池さんは、読み聞かせの改革から始めた。先生たちに楽しく効果的な読み聞かせの時間を提案し、「絵が大きい本を用意しよう」「登場人物になり切って読んでみよう」と伝えた。物語が聞きやすいようにゴザを敷いたり、椅子の配置を変えて子どもたちを座らせた。読み聞かせの時間は子どもたちの一番の楽しみ時間になり、園児はもちろん、先生たちもすごく嬉しそうだった。

公立幼稚園で初めてのクリスマスコンサートも企画した。「子どもには無理」という声ばかりだったが、「練習すればできるよ」と歌や踊りの練習を重ね、成功させた。先生が楽しんでいると、子どもたちが輝く。その姿を見て、先生は楽しく充実した気持ちになる。「楽しい」の相乗効果で、幼稚園はどんどん良くなっていった。マダガスカルでは10日程度の研修で幼稚園の先生になれるという。幼児を対象とした数や文字の具体的な教授法をしっかりと学ぶことはない。「先生たちも、これじゃいけないと思いつつやっていたそうです。でも、教授法を学ぶ場所もなく、どうしていいかわか



いま、
読みたい
電子書籍

この方に
聞きました！



著者
みずの たかゆき
水野隆幸さん
モロッコ/水路設計/1975年度
2次隊前期・愛知県出身

背高のっぼのパパイヤと
オズワルドの月

著：水野隆幸
発行：文芸社



<https://www.bungeisha.co.jp/bookinfo/detail/978-4-286-24285-9.jsp>

90年代のブルンジを舞台に繰り広げられる人間模様 自らの価値観を見直すきっかけにも

東アフリカの国ブルンジ。本書では、1990年代の同国を舞台に、架空のNGOのボランティア派遣準備のため家族と共に赴任してきた日本人と、その周りの人たちの9カ月間が描かれている。

著者の水野隆幸さんは93年1月から10月まで、JICAの契約調整員（※）としてブルンジに駐在したが、クーデターの勃発で隊員らに伴って国外退避することになった。当時の経験を基に、実際の人物や出来事と、水野さんの創作とを交えて執筆したのが本書だ。特に、クーデター発生から日本人たちの出国までの6日間は、水野さんが契約調整員として書いた報告書の内容に基づくだけに緊迫感が伝わってくる。

しかし、これは単なるブルンジの悲劇の物語ではない。むしろ重きを置かれているのは、登場人物たちの人間模様だ。

主人公は、日系NGOのブルンジ事務所

長・立山洋平と、立山家の夜警として働くオズワルド青年の二人。その他に、立山の運転手兼便利屋として雇われたタクシー屋のプラザなど、彼らを取り巻く人々の視点が加わることで、現地のさまざまな出来事が多面的に表現されている。

例えば盗みに関すること。日本人ボランティアの遠藤が、大金がポケットに入った作業服をプラザの車の中に置いたままその場を離れている間に、プラザに数百ドルを抜き取られる事件が起きる。

プラザは立山の運転手としてボランティアとも親しく、特に遠藤はプラザから現地語を習い、時には家で食事をごちそうになる仲だった。それ故、プラザの車の中に金を置いて離れてしまったのは“友人”として気を許していたからだと憤る遠藤。だが、プラザからすれば、直接の雇用主ではなく語学力も乏しいボランティアに勝手

気ままな運転の依頼を繰り返されることにいら立ちを覚えたり、平気で金を放置していく姿を“ずぼら”に感じたりしていた。そして仕事や家庭の事情で金が必要でもあったプラザは、盗みに手を染めたのだ。

自身の不用意な言動が犯罪を誘ってしまうリスクは、協力隊員ならば誰しも胸に留めておきたい戒めである。本書では現地人側の心情も丹念に語られているため、相手の考え方も腑に落ちやすい。

当時のブルンジは隣国ルワンダと同じくツチ族とフツ族が対立し、ルワンダ虐殺の前年である93年から始まった内乱も、フツ系大統領の殺害に端を発する。そんな情勢を背景に登場人物たちが織り成す人間ドラマは、純粋に小説として楽しめる。一方、協力隊員にとっては、自分の常識にとらわれて視野が狭くなっていないかと、自らを振り返るきっかけにもなるかもしれない。

※契約調整員→2007年まで在外拠点で協力隊事業支援業務を担っていた。現在は企画調査員[ボランティア事業]（VC）がその役割を担っている。



保育参観日で、わが子の様子に見入る保護者たち

活動の舞台裏

華麗！パフォーマンス分科会

2024年2月中旬、マダガスカル第3の都市、アンチラベのカフェレストランに、衣装もばっちり決めた日本人中心のグループの姿があった。現地派遣中の隊員有志らでつくる「パフォーマンス分科会」のライブだった。リーダーを務めるのは、幼児教育職種で派遣中の菊池千登世さん。音楽大学出身の菊池さんは、ブッチーニ作曲のオペラ「ラ・ボエーム」より、ソプラノの aria、「ムゼッタのワルツ」などを歌い上げた。



①5人の隊員で日本の歌謡曲の演奏も
②ダンスも披露

当日の出演者は、マダガスカル人を含む12人。体育隊員のキレのあるダンスや、魅惑のギター演奏なども披露された。お揃いの衣装はコミュニティ開発隊員が制作した。

ステージは、会場を替えて、今回が5回目。過去には阿波踊りを見せたこともあるという。「パフォーマンス活動を通じて、他の隊員のきらりとした新たな一面が見られます」（菊池さん）。

「なかつたのです」。
活動を始めて1年余り。効果的かつ楽しく数字やアルファベットを学べる方法を知った先生たちの「自分の取り組みを、他の園の先生にも紹介したい」という気持ちが高まったため、講習会を開くことにした。菊池さんが教えるのではない。講師役は共働してきた先生たちで、それぞれの得意分野を担当してもらった。約90人が集まり、「すごく良かった」と感想が聞かれた。

「みんな新しい情報に飢えているんです。参加費以上に価値のある情報をいっぱい用意しています。集まった先生方が満足して帰って帰ってもらえるように工夫しています」
座学や実践報告に加え、時には演技の得意な先生が「理想の先生、悪い先生」のような劇を披露する。参加した先生たちからは「今度は自分に講師をやらせて」といった声も上がる。

菊池さんは研修会の実施後、研修会に参加した先生が勤務する幼稚園の巡回を始めた。基本は3回続けて同じ園に行く。1回目と2回目は授業の様子や机の配置、掲示物などを確認し、アドバイスをする。3回目は保育参観日。

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 おかもとりゅうた
岡本龍太さん

タンザニア/コミュニティ開発/2017年度4次隊・広島県出身
大学卒業後、大手生命保険会社に就職し、営業や人事を担当。2020年3月に協力隊活動を終え帰国。協力隊経験を生かしてタンザニアで仕事をしたいと、井崎 奨さん（タンザニア/体育/2016年度3次隊）、三戸勇輝さん（タンザニア/コミュニティ開発/2016年度4次隊）と20年12月にWATATU株式会社を設立し、代表取締役役に就任。タンザニアの農業事業のほか、日本の中小企業の海外進出支援や協力隊OVの就職支援などを展開する。

今月のテーマ…就職先探し

今月の
お悩み

隊員時代から
早めに就職活動している人もいて
焦ります

（コミュニティ開発/男性）

任期満了まで、残り1カ月を
切りました。同期たちは3カ月
くらい前から、帰国後に向けて
転職エージェントに登録した
り、企業にコンタクトを取った
りして、ほぼ就職が決まってい
る同期もいます。
自分はなんとなく国際協力の
仕事かなと思ってはいるもの
の、実際何がしたいか、何がで
きるかわからず、動いていない
ため、心配です。

岡本さんからの
アドバイス

仕事を通じて自分が
満たしたいことを考えてみましょう。
「国際協力の仕事かな」というのも周りの目を
気にした結果になっているかもしれません



「協力隊転職ナビ」へ頂く就職
活動の相談事で多いのは、「何
がしたいかわからない」「何が
できるかわからない」「どういっ
た業種の企業が自分を欲しいと
思ってくれるかわからない」の
三つです。
特に多いのが「一つの「何が
したいかわからない」で、協力
隊に新卒で参加した人からも
社会人経験を経て参加した人か
らも相談を受けます。
僕は「人生で唯一のやりたい
ことを見つけないといけない」と
いう幻想を捨てましょう。仕事
という「手段」を通じて満たし
たいニーズはなんなのか、「他
人からの称賛」「同僚やお客さ
んとつながり」「社会に貢献
している感覚」など仕事を通じ
て得たいと思っているものはな
んなのか、考えてみましょう」
とアドバイスしています。

「何ができるか」「どんな業種
に必要とされるか」に関して
は、周囲に評価を聞いたほうが
早いかもしれません。同期や先
輩隊員といった日本人だけでな
く、カウンターパートや同僚に
も意見を聞いてみましょう。
「私にはこんなことできないけ
ど、あなたはこれ得意よね」く
らいで構わないので、言われた
ことのあるエピソードをなるべく
挙げてみると、自分では意識
していなかった強みが浮き出
てきます。やりたいことは自分
で完結しなければなりません。自
分ができることは比較論なので、自
分ができると思っていないこと
でも、人にできると思われてい
れば「できる」としていいと思
います。
最後に、協力隊経験者の「自
分と圧倒的に違う考え方の人た
ちと生活を共にし、試行錯誤し
て活動を続けてきた点」「自分
で考えて主体的に動ける点」が、
帰国後の社会生活でも大きな強
みになると僕は思っています。
どのように働きたいか、何がで
きると思われているかを客観的
に考えてみてください。

胸に手を当てて「他人を抜きに
して、本当に国際協力がいいと
思っているのか」を自問してみ
ましょう。
SNSの中でも、インスタグ
ラムやフェイスブックは自分の
キラキラしたことを書く傾向が
強いので、同期のやる気に満ち
あふれた投稿や就職活動の様子
を見て、気持ちが乱されたりす
ることもあるでしょう。「欲望
の見つけ方 お金・恋愛・キャ
リア（ルーク・バージェス著、
早川書房）には、自分が主体的
に「これがしたい」と思うこと
の多くは人の影響を受けている、
といった内容が書かれています。
僕自身、自分を振り返る際に参
考になりました。読書好きの人
にはお薦めします。
本なんて読んでいる暇はな
い！という人も、「やりたいこ
とを見つけないといけない」と
いう幻想は捨てること。多くの
人は、「唯一の」やりたいこと
なんてなくていいんです。「現
在の自分はこれに興味があるな
とか、これやっているとちょっと
ハッピー」程度でいい」を、覚
えておいてほしいと思います。

「何ができるか」「どんな業種
に必要とされるか」に関して
は、周囲に評価を聞いたほうが
早いかもしれません。同期や先
輩隊員といった日本人だけでな
く、カウンターパートや同僚に
も意見を聞いてみましょう。
「私にはこんなことできないけ
ど、あなたはこれ得意よね」く
らいで構わないので、言われた
ことのあるエピソードをなるべく
挙げてみると、自分では意識
していなかった強みが浮き出
てきます。やりたいことは自分
で完結しなければなりません。自
分ができることは比較論なので、自
分ができると思っていないこと
でも、人にできると思われてい
れば「できる」としていいと思
います。
最後に、協力隊経験者の「自
分と圧倒的に違う考え方の人た
ちと生活を共にし、試行錯誤し
て活動を続けてきた点」「自分
で考えて主体的に動ける点」が、
帰国後の社会生活でも大きな強
みになると僕は思っています。
どのように働きたいか、何がで
きると思われているかを客観的
に考えてみてください。

地域コミュニティや学校で 防災・災害対策の啓発を行う



しんざと たく
新里 拓さん
コスタリカ/2017年度1次隊・沖縄県出身

PROFILE
沖縄県の教諭として高校で地学を4年間教える。自然災害や防災について教えた経験を海外で生かすこと、地震や豪雨など同じ課題を持つ国の人々と考えること、行政側から学校や地域に関わる活動がしたいと、現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加。帰国後は復職し、高校で地学を教えている。

配属先:アセリ市役所
要請内容:日本の防災手法などを用いて、地域住民への防災啓発、防災に関する講習会や防災フェアなどを実施する。また、既存の防災教材や危険マップなどを有効に利用し地域住民、教師、生徒に防災教育を普及する。

この職種の先輩隊員に注目！ 現場で見つけた 仕事図鑑

#0030

「防災・災害対策」

分類：計画・行政
派遣中：16人(累計：99人)
類似職種：コミュニティ開発、行政サービス
※人数は2024年2月末現在

ドローン活用の指導を通じて 災害対応力向上に貢献



あめみや しょうご
雨宮 聖さん
ソロモン/2017年度2次隊・東京都出身

PROFILE
大学で土木工学を専攻。建設コンサルタント会社に2年勤務後、海外で経験を生かしたいと協力隊に参加。帰国後はJICAジュニア専門員、JICAエチオピア事務所の企画調査員(ボランティア事業)を経て、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)のプロジェクトに携わりトルコに赴任中。

配属先:国家災害管理局
要請内容:国家災害管理局本部で防災教育・防災啓発活動、災害発生時の緊急対応、災害情報管理などを同僚と共に、自身の経験を生かし、市民の減災、同局の能力向上に貢献する。

最大のピンチ

赴任当初、CPが小学校での防災授業をセッティングしてくれ、私が実施して成功しました。そのため学校や地域への訪問はCPが段取りをしてくれるものと思い込み、資料や教材作りをしながら「まだかな」と声がかかるとを半年ほどもんと待っていました。ある日、CPから「タクは何をしたいのかわからないね」と言われ、待っているだけではダメだと気づきました。CPに地域や学校へ訪問したいことを伝え、自分から積極的にアポを取るようになりました。

最高のやりがい

各訪問先の防災リーダーたちが私の活動に理解を示してくれて、とても協力的でした。自分たちの地域に災害リスクがあることを認識していて、「何とかしなければ」と思っており、各家庭へ防災アンケートをしに行く際も賛同して同行してくれました。防災授業の申し出を快く受け入れてくれた校長先生方も同様です。そうした協力がなければ私の活動は全うできませんでした。



1 新里さんが作った「防災かるた」で災害が起きた時にどう行動するかを学ぶ子どもたち
2 緊急災害対策委員会の会議で発表する新里さん

赴任

序盤

中盤

帰国

防災・災害対策隊員の配属先は、政府の危機管理庁や地方自治体の災害対策部署などがある。それぞれの地域で発生しやすい災害に応じた防災と災害対策の策定、地域や学校などを対象にした防災講習の企画・実施など活動は幅広い。隊員には、災害対策や防災教育などに携わった実務経験を生かした活動が期待されている。

CASE 1 地域コミュニティと学校を巡回 課題を把握し対策委員会で共有

新里拓さんはコスタリカのアセリ市役所の「緊急災害対策委員会」に所属し、地域住民に対する防災知識の啓発や、小中学校・高校での防災授業を行った。ア

訪問数は400軒を超えた。防災袋を救急箱のことだと思っていたり、避難経路を家族で話し合っていないかったり、ハザードマップの存在を知らなかった、という人が相当数いた。

学校を訪問しての防災授業では、小学生には災害発生時の初動についてクイズやかるたなどを使って楽しく学んでもらい、中学生には自宅の家具の配置を描かせて、危険箇所や安全な場所を意識するように指導した。

ある学校を訪ねると、生徒は2人だけで、校舎にはヒビが入っていた。校長に聞くと台風で被災し、生徒の一人は家を失い、大勢いた生徒は他の学校に移ったばかりという。「こんな学校にも来てくれて本当にありがとう」。その言葉が心に響き、訪問件数など「数」にこだわりがちになっていた自身をいさめたと新里さんは振り返る。

CASE 2 ドローンの活用方法を指導 実際の災害でも有効性を確認

ソロモンの災害対応力の強化につながるよう、配属先の同僚にドローンの技術を教えたのが雨宮聖さんだ。国家災害管理局は、防災、被災後の緊急対応、復旧・復興活動を統括する部署だ。ソロモンはサイクロン、地震、津波など自然災害が多く、島嶼国のため交通・通信インフラが乏しい。情報を住民に迅速に伝達し、緊急援助を行

セリ市は洪水や地滑り被害が多く、住民の防災意識の向上のための防災教育が欠かせない。

新里さんは各コミュニティに連絡し、その地域の防災リーダーと共に家庭訪問し、市が発行するハザードマップを渡し、各家庭の立地条件や周囲の環境を見て防災指導を行った。

訪問と同時に防災意識の調査も実施した。防災・災害対策について尋ね、回答を記録していった。

「配属先に調査結果を共有することで、緊急災害対策委員会で検討すべき課題を把握してほしいと考えたからです」と新里さん。委員会には警察、消防、赤十字の代表が出席しており、広く問題点を周知できるからだ。

うためには、災害状況をいかに素早く収集するかが重要な課題だ。

雨宮さんは前職で橋の耐震設計に携わり橋梁の維持管理のためにドローンについて学んでいた。ちょうど配属先に国連からドローンが寄贈された時期だったため、ドローンを教えることが活動の中心になった。

雨宮さんから運用・管理方法、操縦法から現場での活用までひととおり教わった同僚たちは、他の職員に指導できるまでにスキルを身につけていった。

雨宮さんのカウンターパート(以下、CP)が留学のため交代してからは、CPが行っていた他の省庁へのドローン紹介も、雨宮さんが引き継いで行った。「ドローンの活用方法を知っている人をできる限り増やすことが大事だと考えたからです」。

配属先でも、災害の被害状況の確認や評価のほか、沿岸コミュニティの防災プロジェクトでは写真データを活用し津波からの避難マップの作成も行うなどドローン活用が進んでいった。

任期終盤にはタンカーが座礁し重油流出事故が発生した。配属先はドローンでモニタリングを行い、それを基にオーストラリア政府へ協力を要請した。「重油流出は初めての対応でしたが、オーストラリア政府から、飛行機による写真よりもわかりやすく役立ったと評価され、ドローンの有効性を皆で実感する大きな出来事となりました」

最大のピンチ

ドローンを操縦できるようになった同僚一人だけで業務をしてもらったところ、本人の視界の範囲外に飛ばしてドローンを紛失することがありました。いつ操縦を再開させるか悩みましたが、事故の原因をきちんと指摘し理解してもらった上で、事故防止、安全対策などの集中指導を行いました。その結果、一人で操縦する際は周囲の状況を確認しドローンの監視役を他の人に頼んで飛ばすことを徹底しました。教える内容を深める大切さを学びました。

最高のやりがい



1 ドローンで撮影したタンカーの画像には、漏れ出した重油(海中の黒い部分)の様子が鮮明に記録されている
2 ドローンの操作を国家災害管理局の同僚に指導する雨宮さん

ドローンが実際にどれだけ役立つのかは配属先にあまり認識されていない状態でしたが、タンカーの重油流出事故でドローンによる状況把握が評価されたことは自信になりました。また、他省庁の職員にドローンを教えていたCPが留学で不在となり、以降は私が教えました。その後、他省庁でもドローン活用が進み、国連から「大洋州でソロモンが最も進んでいる」とドローン活用プロジェクトの継続を示してくれた時に大きな手応えを感じました。

赴任

中盤

終盤

帰国

みんなの教材づくり & アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。



今月の先生
くしだ かえで
榎田 楓さん

(タイ/環境教育/2018年度3次隊・茨城県出身)

家族や大学の教諭など、協力隊経験者が身近にいた榎田さんは、大学で動物学を学んだ後、新卒で協力隊に参加した。バンコクの隣県にある科学教育センターに配属され、主に小中学生に身近な環境への関心を促す活動を行った。コロナ禍による一斉帰国を経て、再赴任した。2021年に帰国して、現在は民間企業に勤務。



榎田さんは展示にさまざまなアクティビティを取り入れて子どもたちに生物に興味を持ってもらうように工夫した

不思議なリング状の折り紙
カライドサイクルを作る

「カライドサイクル」を知っていますか？6つの四面体が数珠つなぎに輪を成していて、クルクルと無限に回すことができる不思議なリング状の折り紙です。内側と外側が連続的に入れ替わり、4つの面に柄を入れると、その様子だけでも美しく、美しいです。子どもたちにチョウの生態などを教える活動をした榎田楓さんは、卵から成虫までのチョウの変態を遊びながら知ってもらおうと、カライドサイクルを利用して、4面の柄を変えてどんなことに使用するかはアイデア次第です。

カライドサイクルに貼る画像の準備などが少し難しいですが、まずは台紙をプリントして組み立ててから、好きな絵を直接描いて遊んでもよいでしょう。

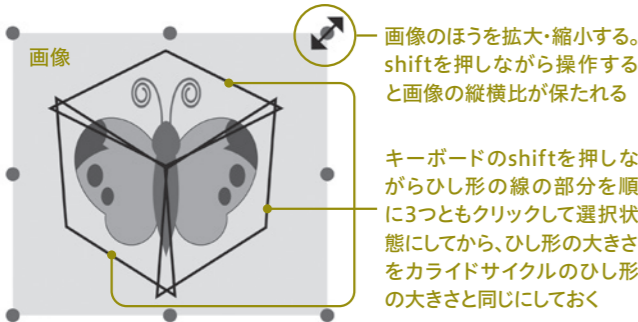
step 1 画像をひし形に分割する

カライドサイクルに貼りつけるための4種類の画像を準備します。1段につき、ひし形が3つ横に並んだ構造になっています。各ひし形に貼りつけるため、画像もひし形に切り抜いて3つに分割します。

以下にパワーポイント(※)を使用した方法を紹介しますが、あらかじめプリントされた画像をカライドサイクルの台紙の形に合わせてはさみで切り抜いてもOKです。

①ダウンロードしたデータの3つ合わせたひし形の大きさを、実際に作るカライドサイクルのひし形と同じサイズになるように拡大・縮小します。

②パワーポイントに画像を挿入し、ひし形3つが重なった状態のまま、画像の上に置いて、画像を拡大縮小し、カライドサイクルに貼る部分が内側に入るように調節します。

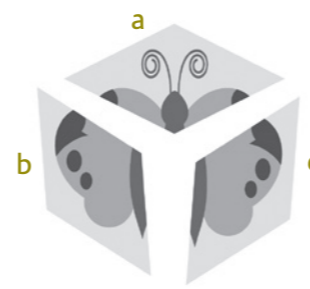


③画像とひし形1つを選択してコピーします。それを下図のように3セット作ります。その後、1セットずつ、画像をトリミングします。

(shiftを押しながら画像→ひし形の順に両方をクリックして選択し、パワーポイントのメニューの描画ツールの図形の書式タブをクリック→図形の結合→重なり抽出)

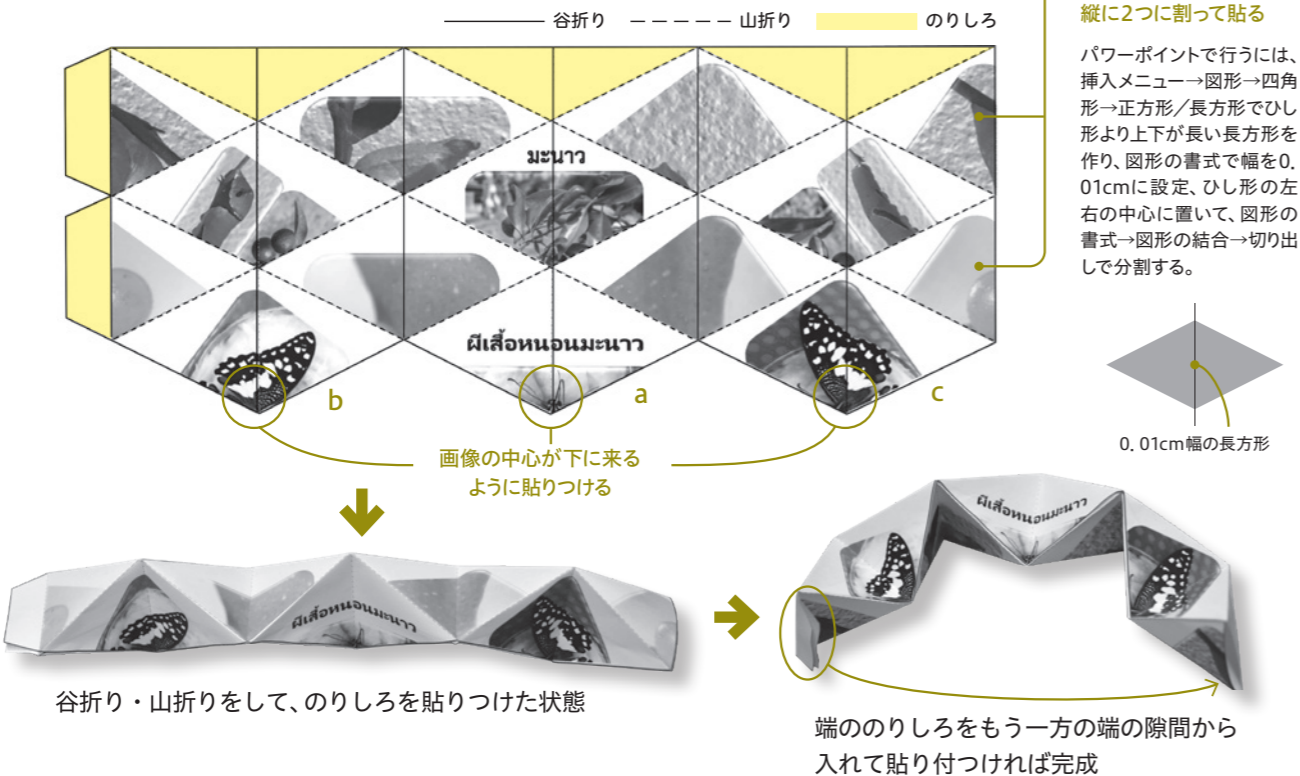


④ひし形に3分割された画像ができます。これをパワーポイント上でカライドサイクルに貼りつけるか、プリントしてはさみで切り抜き、カライドサイクルの台紙に貼り付けます。

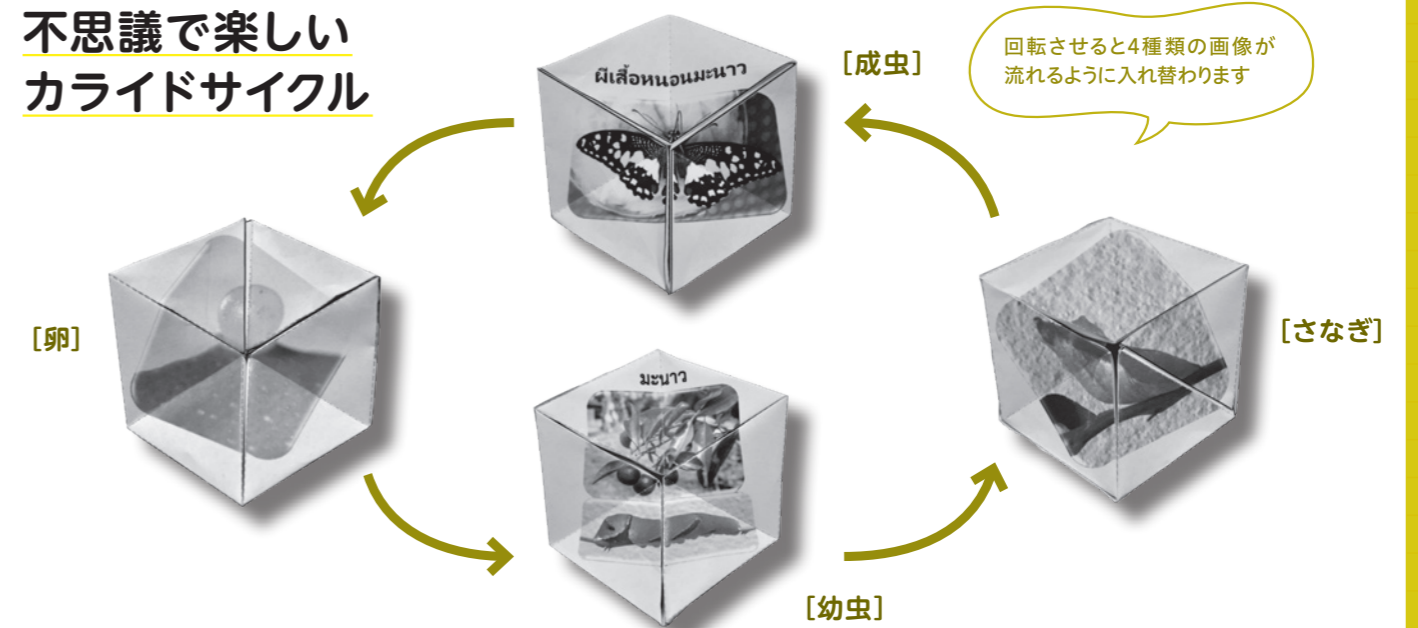


※パワーポイントのバージョンによっては、図形の結合機能がない場合があります。

step 2 カライドサイクルの組み立て

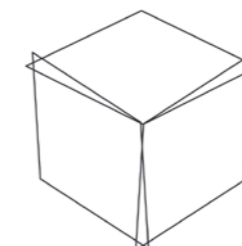


不思議で楽しいカライドサイクル



まずはデータをダウンロード

カライドサイクルを作るには、右のリンクからパワーポイントのファイルをダウンロードして、データを使用してください。ファイルには、榎田さんが作成したチョウの生態のカライドサイクル(左ページの作例)、画像が貼られていないカライドサイクルの台紙、3つのひし形を合わせた画像切り抜き用の型(右図、step1で使用)が入っています。



ファイルダウンロードへのリンク

パワーポイントがパソコンにインストールされていない方は、PDFをダウンロードして使用してください。

●パワーポイントファイル
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202404/pdf/05_kaleidocycle.pptx



●PDFファイル
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202404/pdf/05_kaleidocycle.pdf



シュエカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

「国際協力の現場に戻りたい」と 開発コンサルタントへの転職を決意



今月の先輩

齋藤智美(派遣時姓 トラン)さん Tomomi Saito
東ティモール/コミュニティ開発/2016年度3次隊・新潟県出身

就職先：株式会社オリエントタルコンサルタンツグローバル

事業概要：開発コンサルタント。社会インフラの初期調査から計画、設計、施工管理、維持管理、マネジメント、事業運営などのコンサルティングサービスを提供。

齋藤智美さんの略歴

- 1988年 新潟県生まれ
- 2013年3月 大学院修了
- 2013年4月～16年 出版社に勤務
- 2017年1月 協力隊員として東ティモールに赴任
- 2019年1月 帰国
- 2019年4月～23年6月 READYFOR株式会社に勤務
- 2023年7月 株式会社オリエントタルコンサルタンツグローバル入社



JICA海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

大学院修了後、出版社勤務を経て協力隊に参加した齋藤智美さん。大学院でジェンダーの研究をしていたことから女性支援に関する要請を探して応募した。派遣先の東ティモールでは、女性の生産者グループを支援したが、活動中に感じたのは、地方と首都との地域格差だった。「地方というだけでさまざまなチャンスが奪われていました。翻って自分の出身地の新潟を思うと日本も同じです。帰国後は日本で、地域活性化や地域貢献につながる仕事をしたいと思うようになりました」。

そこで探した就職先は、クラウドファンディングサービスを提供しているベンチャー企業のREADYFOR

株式会社。

「協力隊の活動で、何を始めるにもお金が必要だと痛感しました。その部分をサポートできることと、地域活性化や国際協力のプロジェクトもあるということが、決め手となりました」

しかし、入社して3年がたつと、国際協力の現場に戻りたいという気持ちが強くなってきた。「100以上のクラウドファンディングのプロジェクトに携わりましたが、中でも国際協力のプロジェクトへの思い入れは特に強く、それが私の一番関心のある分野だと気づきました。違う業界に転職するなら年齢的にラストチャンスかもしれないという気持ちもありました」

そんな思いを協力隊時代の仲間と相談したところ、株式会社オリエントタルコンサルタンツグローバルの社員を紹介され、会うことになった。

「開発コンサルには興味があったのですが、理系が多いイメージがあり、文系の私には自信がありませんでした。そんな迷いも、直接会って話すことで解消できました」

入社からもうすぐ1年。現在は、中小企業の海外進出を支援する案件などに携わり、海外への出張も多い。

「やりがいを感じるのは、現場で現地関係者の反応に触れられる時です。プロジェクトに関わって機材の設置が実現した時など、この仕事に携わって良かったと感じます」

現在の仕事

メインで関わっているのは、JICAが進める中小企業ビジネス支援事業や総務省が進める技術移転事業の案件です。日本の企業が持っているシステムやサービスを開発途上国で活用し、ビジネス化することができないか、現地に出向いて調査しています。また、ODA(政府開発援助)事業では、1カ月半に1度の頻度で、現地に1週間ほど滞在し、調査やヒアリングを行っています。想定外の出来事への対応や、移動が多く体力勝負のところがありますが、その点においては協力隊での経験や体調管理の習慣が生きていると思います。



ベトナムで水産業の案件に携わった際の写真

先輩へメッセージ

就職活動においては、人によっては協力隊での2年間のボランティア活動をデメリットに感じるかもしれませんが、企業側も否定的に捉えることがあるかもしれません。けれど、協力隊の活動は他ではなかなかできない貴重な経験です。現地で何を経験して、何を思って次の仕事につなげていきたいと考えたのか。それを整理してきちんと伝えることができれば、就職活動でもいい出会いがきっとあるはずです。協力隊の経験をこれからの人生でどう生かすかは、自分次第だと思います。

3 READYFOR株式会社 2019年4月～23年6月

キュレーターとして、クラウドファンディングを希望する人と、何を目的にやるのか、資金をいくら集めたいのか、いつ始めるのかなどを相談しながらプロジェクトを立ち上げていきました。入社3年目に転職を考えるようになり、友人の紹介で株式会社オリエントタルコンサルタンツグローバルの社員と会いました。そこで会社の事業について説明を受け、採用試験を受けることを決めました。

4 書類提出 2023年4月

履歴書、職務経歴書を提出しました。私の職務経歴は、出版社、協力隊、ベンチャー企業と、一貫性がありません。自己PRではその点を強みにするため、いろいろな経験をすることで多様な視点を持てたこと、それがこれからの業務に生かせることを強調しました。

5 小論文提出 2023年4月

テーマは志望動機、コンサルタントとして何をやりたいか、という内容だったと記憶しています。

6 面接 2023年4月～5月

1回目の部門長との面接では、前職でのクラウドファンディングサービスや協力隊の活動について聞かれました。協力隊については、どのような環境で生活していたのかを確認されました。コンサルタントは海外で厳しい環境の中、長期間、業務に当たることがあるため、耐性を見られたのだと思います。2回目は役員面接で、私が何を専門にしたいのか聞かれました。それに対して、大学院で学んできたジェンダー、前職で経験したスタートアップを軸に、民間に近いところでプロジェクトに携わりたいと話しました。途上国で2年間活動し、どんな状況でも何とかしてきた経験も評価されたようです。

採用決定 2023年5月

1 協力隊時代 2017年1月～



首都の展示会で農産物や特産品を生産者グループと販売する齋藤さん

要請内容は、東ティモール第2の都市パウカウのコミュニティ開発センターで、11ある女性生産者グループの農産物の加工・販売活動を支援することです。生産者グループは、活動が軌道に乗っているところもあれば、支援の手が届いておらず活動が滞っているグループもありました。私は後者の支援に力を入れることに決め、メンバーが何に困ってうまくいかないのかヒアリングしながら、他のグループと差別化するための商品開発のアイデアを出したり、パンフレットなどの販促材料を作ったりしました。

2 帰国・就職活動 2019年1月～

任期終了の半年くらい前から日本の地域活性化に取り組む企業や団体を掲載しているサイトの「日本仕事百貨」、スモールビジネスやベンチャーを紹介しているアプリ「Wantedly」などで求人情報を収集し、そこでREADYFOR株式会社の求人を見つけました。学生時代に社長のインタビュー記事を読んで面白い取り組みだと思ったことを思い出し、1月に帰国してすぐにエントリーし、採用となりました。

派遣から 始まる 未来



進学、非営利団体入職や
起業の道を選んだ先輩隊員

▶ 写真家・
サウナマスターとして活動中

東海林美紀さん Miki Tokairin
ニジュール/エイズ対策 / 2006年度3次隊 / 山形県出身



協力隊時代、診療所で乳幼児の体重測定を補助する東海林さん



生きるとは、健康とは、
すべての活動の原点はニジュールの隊員経験にある

サウナの中で草木の枝葉を束ねたウイスクを用いて全身をトリートメントし、発汗やリラククスを促すウイスキングなど、さまざまなサウナプログラムを行うサウナのプロサウナマスターの東海林美紀さんが、エイズ対策隊員としてニジュールに赴任したのは、今から約17年前のこと。

「大学時代は国際協力NGOでインターンをしていて、公衆衛生の大学院に進む予定でした。その前にフィールド経験をと思っていったところ、知人に協力隊にエイズ対策という職種があることを教えてもらい、応募しました」

当時は、国際的に「アフリカでエイズ対策を」という機運が高まっていたことから、東海林さんは、ニジュールの初のエイズ対策隊員となった。

「診療所やNGOで村の人たちの支援をしつつ、不定期に国のエイズ対策委員会やアーティストたちと組んで啓発イベントの企画と運営をしました。初のエイズ対策隊員で、しかも一人。村から国まで、たくさんの人と幅広く動けたことはとても勉強になりました」

とはいえ、活動としての立派な成果を出したいと思っていたわけではない。言う。「私は現地の人たちと衣食住を共にして、観察していただけです。ニジュールは暑さも生活の厳しさもケタ違い。人が生きていくこと自体が大変な国です。女性の地位は低く、男性に自分の意見を言うことが難しい。『コンドームをつけて』と頼むこともできず、HIVに感染した夫から知らない間に感染させられるケースもありました」。

赴任当初は、帰国したら組織の中で公衆衛生に関わるつもりだったが、ニジュールで過ごすうちに、アートやコミュニケーションという手段で、人々の行動を変え、暮らしを豊かにする手伝いをしたいと思うようになった。

「ニジュールの女性たちは我慢強く、しなやか。過酷な環境も『神から与えられたもの』と受け入れていきます。そういった女性たちが単色の衣装を着て、アフリカの夕日に照らされている姿は、見られるほど美しく」

そんな女性たちの姿を撮影するために、隊員活動を終えて、またアフリカに戻った。2カ月間の滞在後、写真展を経て、東海林さんのフォトグラフィアとしてのキャリアがスタート。インターンをしてきたNGOと業務契約し、フォトグラフィア兼ライターとして世界中を巡ることになった。時代はチャリティブーム。さまざまなメディアの人たちと関わるうちに仕事の幅も広がり、フリーランスに。海外の写真絵本を一冊任される仕事も入ってきた。

「土地の人たちと一緒に暮らしているかのように撮影する私のスタイルは、間違いなく協力隊時代に培ったもの。そこになじむことができれば、ありのままの姿を伝えることができます」

サウナとの出会いは約9年前。撮影

で訪れたフィンランドで、初めてサウナに入って衝撃を受けた。「サウナは熱くて苦しいというイメージ。でもフィンランドに入ったサウナは、静かで暗く、温泉のように熱が重く、気持ちが良い。大自然とつながる体験でした。その後、3回立て続けにフィンランドに行く機会があり、3回目にはサウナを追究していきたくて、そこからは撮影で海外に行く際に、その土地のサウナもリサーチするようになった」

「サウナというのは、もともと人を癒やすもので、昔から世界中にあります。そこで健康とは何か、といった公衆衛生に立ち戻ることになりました」

そしてサウナのプロとして、人の健康(ウェルネス)のために携わることになった。「ボディ、マインド、スピリットの

三つのバランスが取れて健康といわれませんが、スピリット＝魂、信仰の部分も大切です。昔から行われてきた癒やしの儀式を、どう21世紀にアップデートしていくかを探っています」

現在はサウナマスターとしてウェルネス分野で活動しながら、写真家として撮影を続けている。国内外のさまざまな土地に滞在し、衣食住に触れながら、本を作り、サウナにいろいろなアプローチで関わっている。

「私が追い求めているのは、健康に生きるとは何かということ。私はニジュールで、ただ現地の人々と共に暮らしながら活動していただけていますが、点が線になっていくように、自分の人生に起こるすべてのことがつながっていくことを実感しています」

東海林さんの歩み

山形県鶴岡市に生まれる。



日本有数の米どころで、周囲は見渡す限り田んぼ。山や海も近く、山岳信仰が残り、自然を身近に感じながら育ちました。アフリカでの国際医療協力の写真を見たのは、小学校6年生の時。将来はアフリカに行きたいと思い始め、協力隊のパンフレットを自分で取り寄せた記憶があります

2006年、大学3年時から国際協力NGOでインターンを行う。



大学は法学部でしたが、公衆衛生や女性の権利に興味があったことから、大学3年時から女性を支援する国際協力NGOでインターンを始め、研修を手伝いました。さまざまな国際医療協力のセミナーに参加し、たくさん旅をしました。協力隊に応募したのも、大学3年時でした

2007年1月、駒ヶ根訓練所へ入所。



訓練を経てニジュールへ。平日は診療所で母親を対象に乳幼児検診で家族計画や栄養の話をし、週末はNGOでHIV感染者のサポート業務をしました。啓発イベントは、大統領直属のエイズ対策委員会やミュージシャンやダンサーなどのアーティストと組んで企画していました

2009年10月、帰国後にアフリカに戻り、フォトグラファーとしてのキャリアがスタート。



ニジュールとガーナの女性たちの日常生活を撮るために、西アフリカに約2カ月間滞在しました。表現者として国際協力に関わった第一歩です。帰国後、写真展を開催し、女性として、また、母としてたくましく暮らす人々の姿を多くの人に見ていただきました

2014年12月、フィンランドで初めてサウナに出会う。



初めてフィンランドで体験したサウナは衝撃的な心地よさでした。もっとサウナを知りたい!とそこからサウナを追究する旅がスタート。サウナマスターとして国内外での活動をはじめ、大会の審査、ホテルやスパなど、さまざまなサウナ・ウェルネス関連の仕事に携わっています



『世界のともだち』シリーズ(備成社)や『現地取材!世界のくらし』シリーズ(ポプラ社)など著書多数

①写真絵本『世界のともだち 28 エチオピア ナティはたよれるお兄ちゃん』の撮影で行ったエチオピアで ②スチームバスの中でウイスクを使っているサウナプログラム

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

REPORT

現職教員特別参加制度の帰国隊員が 文部科学省へ表敬訪問

2024年3月21日、現職教員特別参加制度により各国に派遣され、任期を終えて帰国した現職教員を代表する6名(2022年度1次隊)が文部科学省の安江伸夫大臣政務官を表敬訪問し、それぞれの派遣国での経験を報告しました。安江大臣政務官は報告を受け、活動を通じて学んだことや、今後の教育活動での現地経験の生かし方について質問。隊員としての貴重な体験や、派遣で気づいた日本教育の魅力などをこれから勤務する学校の同僚・生徒たちにも伝えていただきたいと、今後の活躍への期待を述べました。



左から石田沙織さん(パラオ/小学校教育)、金子真也さん(ヨルダン/体育)、栗栖 潤さん(ガーナ/小学校教育)、安江伸夫大臣政務官、廣田尚哉さん(カンボジア/小学校教育)、高須知世さん(パラグアイ/小学校教育)、出水結花さん(ボツワナ/環境教育)

NEWS

JICA海外協力隊 起業支援 プロジェクト「BLUE」が始動!



2024年3月26日にJICA海外協力隊起業支援プロジェクト「BLUE」が始動しました。「BLUE」とは、協力隊員の帰国後の社会還元支援を目的とした起業支援事業です。起業に関心を持つOVの皆さんに、協力隊で培った経験を生かしたビジネス・非営利活動を通して、日本の地域課題や海外の社会課題の解決に向けて取り組んでいただくことが期待されています。社会起業家育成の知見が豊富な株式会社ボーダレス・ジャパンにJICAから委託する形で、メンター陣・企業・自治体など多くのステークホルダーのご協力をいただきながら、伴走支援やJICAスタートアップハブを実施しています。現役隊員向けのオンラインセミナーもありますので、情報をお見逃しなく!

<https://blue.jica.go.jp/> ▶



RECRUIT

JICA海外協力隊の2024年春募集を開始します

JICA海外協力隊(長期派遣)の2024年春募集を2024年5月17日~7月1日を実施します。募集要項の公開とマイページ登録受付は24年4月25日から開始しています。選考は24年7月上旬から開始し、最終可否通知は24年10月24日を予定しています。お知り合いの方などにぜひお声がけください。キャッチコピーは「人生なんて きっかけひとつ。」です。多くの方からのご応募をお待ちしています。



<https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

クロスロード [2024年5月号]

第60巻第4号 通巻696号
発行日 2024(令和6)年5月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会「クロスロード」編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)JAND
印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊のウェブサイト
でも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



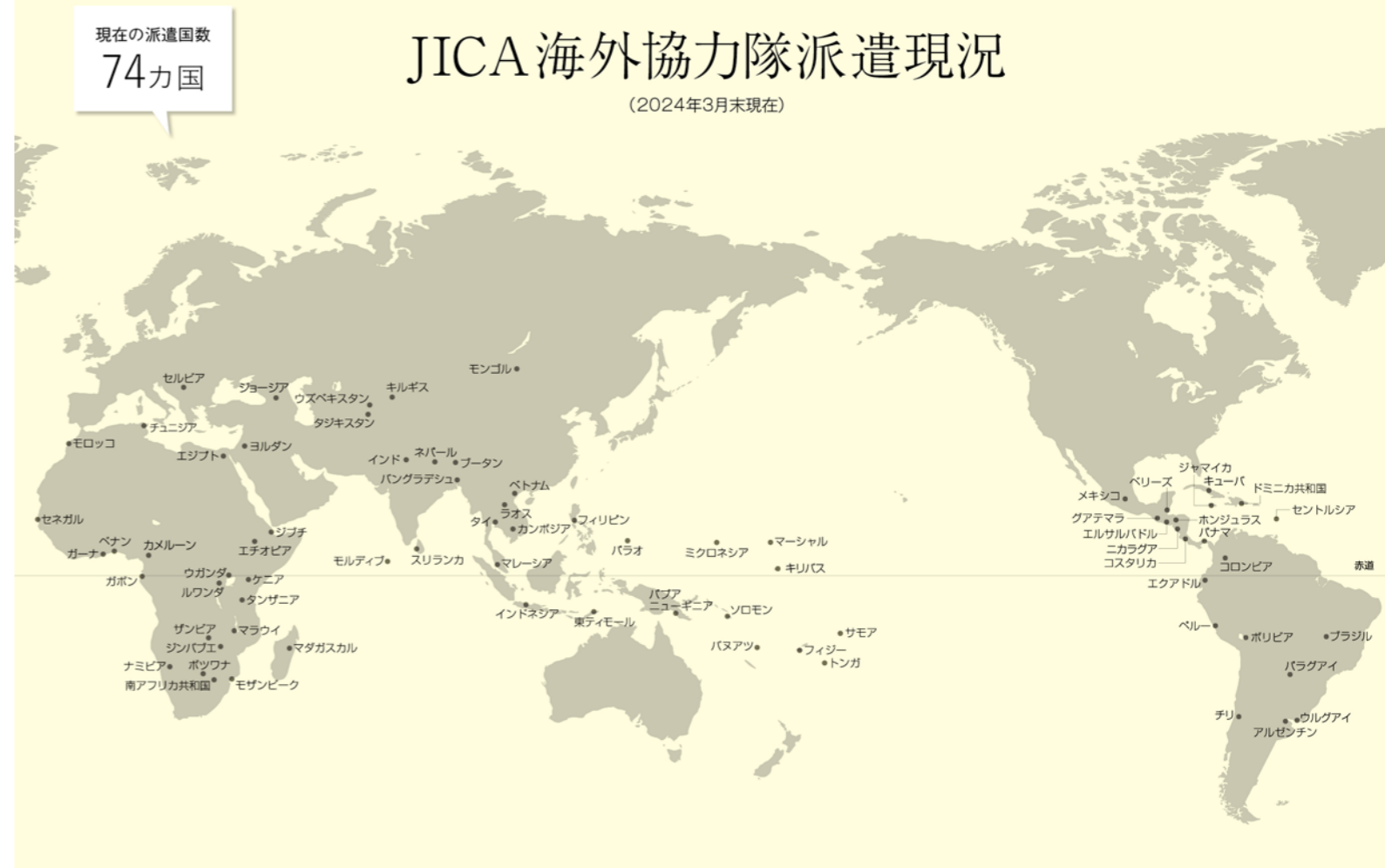
編集後記

特集では、語学やコミュニケーションの工夫という大まかな趣旨で取材をお願いしましたが、皆さんそれぞれにお考えを持っていて感銘を受けました。ポリビアOVの私は“伝わればいい”程度のスペイン語に甘んじていたので、とにかく頭が下がります。(飯淵一樹)

教材づくりで紹介した「カライドサイクル」は、リンク構造をロボット工学などに生かそうと研究している人も多く、そのうちの一人、ヨハネス・シュンケ博士は四面体の数を増やして作製し、動画と台紙を公開しています。その様子はまるでアートです。<https://hannes.home.oist.jp/kaleidocycles.html> (阿部純一)

JICA海外協力隊派遣現況

(2024年3月末現在)



■ アフリカ地域			■ アジア地域			■ 大洋州地域			■ 中南米地域				
国名	一般	シニア	国名	一般	シニア	国名	一般	シニア	国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ウガンダ	18	3	インド	19		キリバス	1		アルゼンチン	4	1	3	
エチオピア	4		インドネシア	28		サモア	1	1	ウルグアイ		7		
ガーナ	45		ウズベキスタン	16	3	ソロモン	15		エクアドル	25	2		
ガボン	7	1	カンボジア	17		トンガ	4	1	エルサルバドル	19			
カメルーン	11		キルギス	27		バヌアツ	9		キューバ		2		
ケニア	32		ジョージア	6	2	バブアニューギニア	8		グアテマラ	25	1		
ザンビア	16	1	スリランカ	23		パラオ	21	4	コスタリカ	13			
ジブチ	13		タイ	18	4	フィジー	16	2	コロンビア	17	5		
ジンバブエ	7		タジキスタン		1	マーシャル	3	2	ジャマイカ	5			
セネガル	24		ネパール	2		ミクロネシア	1	1	セントルシア	10			
タンザニア	15		バングラデシュ	1					チリ	11	2		
ナミビア	10		東ティモール	21					ドミニカ共和国	16		6	
ベナン	23		フィリピン	9					ニカラグア	15	1		
ボツワナ	28	3	ブータン	26	5				パナマ	7	2		
マダガスカル	25		ベトナム	43					パラグアイ	20	2	5	1
マラウイ	25		マレーシア	16	5				ブラジル			43	3
南アフリカ共和国	4	1	モルディブ	2					ベリーズ	11			
モザンビーク	31		モンゴル	33	4				ペルー	38	1		
ルワンダ	31		ラオス	18	2				ポリビア	26	2	1	
									ホンジュラス	25			
									メキシコ	14	10		

■ 合計	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,171 (490/681)	90 (73/17)	56 (23/33)	7 (3/4)	1,324 (589/735)
累計 (男性/女性)	47,549 (25,060/22,489)	6,685 (5,399/1,286)	1,613 (625/988)	555 (256/299)	56,402 (31,340/25,062)

あの日、地球の、あの場所で。

マテ茶はパラグアイ流の飲みニケーション

パラグアイの暮らしで欠かせないのは、何といても「マテ茶」。現地原産のイエルバ・マテという植物が原料で、ビタミンなどが豊富なことから、飲むサラダとも称されています。飲み方は、グアンパと呼ばれる一人用のカップに、茶葉を入れ、先端が茶こし状になったボンビージャという金属製のストローを差し、お湯を注いで飲むというものです。お湯の代わりに冷水を入れる飲み方は「テレシ」と呼ばれ、酷暑となる夏場には、こちらが一般的でした。

驚いたのは、誰もが大きな魔法瓶を抱えて持ち歩き、道でもどこでも暇さえあればグアンパにお湯や水を



Illustration = 牧野良幸 Text = 飯淵一樹 (本誌)

注いでズブズブと飲んでいることです。配属先の音楽教室でも、先生がグアンパを片手に授業をしていました。面白いのは、そんな先生に生徒が「一杯ください」と言つと、先生がパツと自分のグアンパにお湯を注いで渡すこと。回し飲みがマテ茶の基本ルールで、大事なコミュニケーションにもなっているのです。

職員室で飲談している時にもよくグアンパが回ってくるのですが、必ず一人がホスト役として一つのグアンパにお湯を入れて手渡し、みんな順番に飲んでいきます。その時に思わずボンビージャの吸い口を拭きたくなってしまふのですが、それはマナー違反。

とはいえ、私もすぐマテ茶文化に溶け込み、自分用に革で飾った魔法瓶とグアンパのセットを仕立てて持ち歩くようになりました。すると同僚やホストファミリーも大喜び。コミュニケーションの一員として迎えられた感覚があり、より打ち解けることができました。

小田智子さん JICA長崎デスク
パラグアイ / 音楽 / 2017年度4次隊・長崎県出身

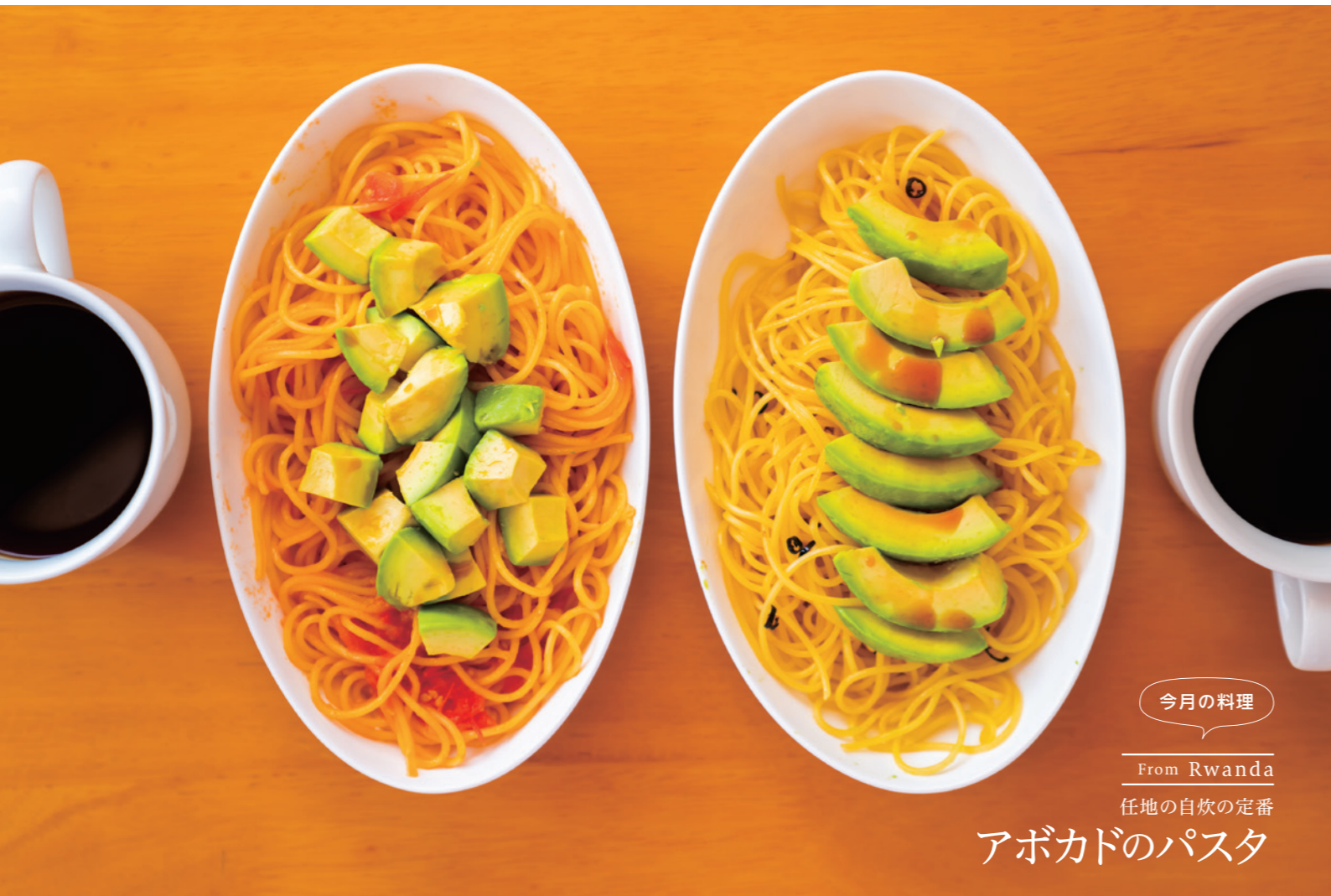
教える人

しいはらわたる
椎原 渉さん



ルワンダ / コミュニティ開発 / 2018年度3次隊・大分県出身
Create Coffee Lab店主。コーヒー鑑定士「Qアラビカグレーダー」。中華人民共和国の大学を卒業後、コーヒー関連製品を販売する会社に勤務し、協力隊に参加。ルワンダにコーヒー隊員として赴任し、コーヒーの栽培支援などを行う。コロナ禍で2020年3月に一斉帰国となったため、派遣合意書を解除し、22年5月に同店を開業。各産地でトップクラスのコーヒー豆を厳選、焙煎し、実店舗とオンラインで販売する。23年3月にはコーヒーの抽出技術を競う大会「コーヒーブルーイングトーナメントジャパン2023」で日本一に。今年4月には大分県内に2号店をオープンした。

▶ <https://createcoffeeab.stores.jp/>



今月の料理

From Rwanda

任地の自炊の定番

アボカドの Pasta

●材料 (1人分)

- 【アボカドトマトPasta】
- ・Pasta (乾麺の状態) 150g
 - ・トマト 1個
 - ・アボカド 小1個
 - ・オリーブオイル 大さじ1~2
 - ・塩 10g程度
 - ・(あれば) 日本のしょうゆ 適量
- 【アボカドペペロンチーノ】
- ・Pasta (乾麺の状態) 150g
 - ・ニンニク 1かけ
 - ・赤唐辛子 1本
 - ・アボカド 小1個
 - ・オリーブオイル 大さじ1~2
 - ・塩 10g程度
 - ・(あれば) 日本のしょうゆ 適量

●レシピ

- ① 鍋の水を沸騰させ塩を多めに入れてPastaをゆでる
- ② アボカドはあらかじめ食べやすいサイズにカットしておく(どんな形でも可)
- ③ トマトベースの場合…トマトを小さめにカットし、フライパンにオリーブオイルを入れてPastaと共に炒める。/ オイルベースの場合…ニンニクを薄切りし、赤唐辛子のヘタと種を取る(そのままでも輪切りでも可)。フライパンにオリーブオイルを入れて熱したらニンニクと赤唐辛子を入れ、Pastaと炒める
- ④ 皿に③を盛り、上にアボカドをのせ、しょうゆを垂らす

<アドバイス>

塩はゆでる時に多めに入れて麺に塩味がつくくらいにしておくと、その後味つけしないで済みます。アボカドは火を通さず、ゆで上がったPastaの上にトッピングします。アボカドの上から日本のしょうゆをかけてと最高です。

Pastaにはコーヒーを。ペペロンチーノには苦味やコクが強いコーヒーが、トマト系Pastaには酸味のあるコーヒーがおすすめです。うちの店なら前者はインドネシア・クリンチ山麓産の「クリンチマウンテン」、後者ならルワンダ・フィエ産の「シンピ」がベストマッチです!

<自炊はもっばらPastaでした>

ルワンダの朝食は外でチャイとパンやサムサ(小麦粉の皮に豆を詰めた揚げ物)、昼食は抜いたりビスケットを食べたりしていました。夕食は皆で飲みに行くならヤギ肉の串焼きやホルモンとビールで、自炊はもっばらPastaでした。安く手に入るアボカドをトッピングしたPastaで、トマトかペペロンチーノにするかは、気分を変えていました。自炊ではほとんど肉を使いませんでしたが、隊員同士で集まる時に先輩隊員が飼っている豚やヤギ、鶏などをさばってくれて、皆で大事に食べたのも赴任中ならではの思い出です。



左:ルワンダのヤギ肉の串焼き
右:大分市にあるCreate Coffee Lab1号店の外観

暮らしている市、町、村



- ▲美しい海はビーチリゾートとして海外からも人気の観光地
- ▲モナステールではリバト(右の低いほうの塔。8世紀に建築されたといわれる要塞)、モスク(左の高い塔)なども見られる

モナステールは、チュニジア屈指のリゾート地で、夏場は海外から多くの旅行者が訪れます。私は海沿いやおしゃれな雰囲気のマリーナを散歩するのが好きです。アジア系の人々がほとんどいないので、一度入ったお店では顔を覚えてくれて、再び行くとサービスしてくれたりします。

公開！ 私の派遣国生活



[チュニジア]

木田麻貴さん

(音楽 / 2022年度3次隊・福島県出身)

活動の様子



木田さんは毎日6～8人の生徒にピアノを指導している。「生徒が笑顔でレッスン室に入ってきたり、終わりに『レッスンの時間があつという間でした』と言ってくれたりすると、とても嬉しく思います」

ダンス・音楽学院(モナステール支部)で、生徒へのピアノの指導と、オーケストラにピアノパートとして参加するのが主な活動です。それぞれの生徒の体格の違いや得意不得意に合わせた指導を心がけています。生徒が弾きたい曲を自分で探してきたり、自身の上達を私に話してくれたりすることが、活動の励みになっています。

食べ物



- 港町だけに海産物が新鮮でおいしい。市場では豊富な種類の魚が売られている
- マンションのお隣さんから頂いたクスス。「肉や野菜のうま味がクススによくなじんでいておいしいです」。地元で人気のレストランでは9.5チュニジア・ディナール(450円くらい)で食べられる

ほぼ自炊しています。市場やスーパーをはじめ、青果店、牛肉店、鶏肉店で食材を調達しています。こちらに来てから魚をよく食べるようになりました。タイ、スズキ、エビ、イカなどが手に入り、塩焼きにしたり、アクアパッツアやスープを作ったりします。現地の料理ではクスス(※)が一番、気に入っています。

住まい



木田さんが暮らす部屋。「窓から美しい街並みと海を望めるところが気に入っています」

シャワーはお湯が出ますし、洗濯機、冷蔵庫もあるので、快適に生活できています。最近は家にいる時にダルブーカ(アラブ楽器)の練習をしています。同じマンションに住むご家族から手料理を頂いたり、フランス人女性からフランス語のレッスンを受けたりと、ご近所づき合いもあります。

※クスス…デュラム小麦の粗びき粉から作る粒を丸めて蒸した料理。

写真提供 = 木田麻貴さん Text = 阿部純一(本誌)